ＡＳＨＵＲＡ

母流倶　玩具

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＡＳＨＵＲＡ

【Ｎコード】
Ｎ５３６７Ｘ

【作者名】
母流倶　玩具

【あらすじ】
砂漠をねぐらとし、ブルーメタルという鉱物を無断で採掘する少女達、
夜叉姫と羅刹。町の連中から恐れられ自由気ままに生きている。
そんな時彼女らの育ての親、弥勒から「ＡＳＨＵＲＡ」を探してくれと頼まれる。
彼女らはしぶしぶ承諾し冒険の旅に出かける・・・

序章　1（前書き）

初めまして、母流具　玩具（ばるぐがんぐ）と申します。
今回初投稿となります。小説は１０年くらい前に3作ほど書いていたのですが
また挑戦しようと書き始めました（苦笑）
拙い文章かもしれませんがよろしくお願いします。
関西出身なもんで所々笑いを散りばめながら書いていこうと思います。
暖かい気持ちで彼女達の冒険譚をお楽しみください。

序章　1

広大な砂漠が広がっている。灼熱の太陽が照りつけ陽炎がゆれている。
おおきな砂埃をあげて疾走する一台の車、その車の中には二人の少女。
一人はハンドルを握り、もう一人はルーペのようなものでなにやら小さな石をみている。

ハンドルを握っている少女が正面を向いたまま、石を見ている少女に語りかける。
「どーお？今回は？」
語りかけられた少女は「ふぅ」とため息をついて
「だめだな、今回も・・・」
と、半ば怒り口調で後部座席に「ポイ」と振り向きもせず石を投げ捨て、シートに深くもたれた。
運転手の少女は片手で頭を掻きながら。
「うーん・・・もうあの採掘場じゃあ無理なのかなぁ・・・」
助手席の少女は、ちょっとふて腐れた表情で、スラリと伸びた足を窮屈そうに組みながら。
「でもなぁ～ここらじゃ、あそこの採掘場が一番可能性があるんだよ。」
地図を広げ、覗き込みながら。
「あと、可能性があるとすれば・・・」
指をすべらせ、ちょっと考えた後トントンと地図を叩き。
「あることはあるんだけど、ここから１００キロ離れた所だね。しかもここ３０年間採掘して０．０５ｇしか取れてない所だけど・・・どうする？」
すこし悪戯っぽく笑いながら話しかけた。

「えー、そんな所行くわけないじゃん。発掘量も今の所と１０分の１もないじゃない。まったく・・・羅刹は意地悪だな。」

羅刹と呼ばれた少女。

瑠璃色の目、額にはバンダナを巻き、腰まで届く黒髪。

端正な顔立ちは少女と言うより大人の女性を感じさせる。体躯も大人の女性のそれである。

「あんたね、そんな事言ってると明日食べる物もなくなるよ？ただでさえチビっこいんだから～。」

くすりと笑い、チビっこい少女の頬をツンツンと突付きながら。

「ねー、夜叉姫ちゃーん。」

夜叉姫と呼ばれた少女。

琥珀色の目、赤毛のショートでピンピンと逆毛がある。

羅刹と対照的にこちらは少女というより少年っぽい。体つきも・・・まぁ・・・未来に期待しようという感じ。

「う、うっさいな～、羅刹は育ちすぎなんだよ～。年だって３つ上だしさぁ～。あたしだって３年たったらバインバインのナイスバディになるんだからね！」

羅刹はキョトンとした顔で。

「それは無いわ。」

「ムキームカつくー！！」

夜叉姫はぷくーと頬を膨らませハンドルをバンバン叩いている。

「んで、これからどうする。ねぐらに戻る？それとも町に行ってスケベ親父からいつもの様に金でも巻き上げようか？」

夜叉姫はすこし考えた後、困った顔をして。

「えーやめなよ～。ただでさえ町であたしたち目を付けられてるんだから。そんなことしてるから『男を喰らう羅刹女』って言われてるんだよー。」

すると羅刹はムッとして。
「失礼ね、私はスケベ親父に抱かれたりしてないよ！鼻の下のばしてる馬鹿親父から金を巻き上げてるだけじゃん。」
それの方が十分タチが悪いんじゃないかな、と思いながら。
「じゃあさ、あたしがまたストリートファイトでお金稼ぐ？」
「却下。そっちの方が稼げない。町の連中、あんたの顔みたら逃げてくじゃない。」
二人がうーんと唸っている。先に語りだしたのは夜叉姫。
「ま、まぁいいじゃん。まだ弥勒（みろく）のじっちゃんから貰った食料とお金も残ってるし、いざとなったらまたじっちゃんから・・・」
羅刹はちょと怒った様な顔をして。
「駄目！弥勒様に甘えちゃ！何の為に二人で暮らしてると思ってるの？弥勒様に迷惑かけない為でしょ？弥勒様は優しいから何でもしてくれるけど・・・そこに甘えちゃだめだよ！」
「わ、わかってるよぉ・・・怒らないでよ。」
夜叉姫はしゅんとして、下を向いている。彼女は羅刹に頭が上がらない。こういう時の羅刹は真面目である。怒らせると敵わない。
「とりあえずねぐらに戻ろう。明日の事はまた考えよう。ね、夜叉姫。」
「う、うん。」
羅刹は夜叉姫の頭をなでて、優しく微笑んでいる。夜叉姫にとって羅刹はお姉さん的な存在であり、信頼できるパートナーだ。
彼女に優しくされると、とてつもなく嬉しい。
「じゃあ戻ろうか。」
アクセルを吹かし砂埃を上げて車は疾走する。二人の住処に向かって。

序章　2

「ふざけるな！まったく、あの餓鬼ども！」
砂漠のオアシスにある町の繁華街の酒場で、一人の男が大きな声で怒鳴っている。他の客も店主も慣れているのか、あまり関心を示さない。すると一人の男が半ば笑いを堪えながら尋ねた。
「よう、伐折羅（ばさら）。またあの嬢ちゃん達にやられたのかい？」
伐折羅は残っていた酒を飲み干し、勢いよくテーブルにグラスを叩きつけた。
「ああ、そうだよ！いいかげんにしろってんだ。」
男は伐折羅の隣に座り、まぁまぁと言い彼の空いているグラスに酒を注いだ。
「おう、すまねえな。これで何回目だ？　ヤツら採掘予定の所まで無茶苦茶にしていきやがる。これまでの損害金額を換算したら１００万ギルはくだらねえ。」
男は目をギョっとむき、ヒューと口笛を鳴らして、酒をグビリと飲んだのち。
「でもよう、相手は小娘だろ？お前ら現場の男達にかかりゃ懲らしめられるだろうよ？」
伐折羅は男の顔にグっと近づき、酔った目で睨み付けた。男は苦笑いをして少し後ずさった。
「甘い！おまえは、ほんとーに甘い！あの餓鬼どもがなんて呼ばれてるか知ってるか？『拳骨（げんこつ）の夜叉姫（やしゃひめ）』と『男を喰らう羅刹女（らせつじょ）』だぞ。俺達が束になったって敵うもんか。そのせいで殆どの作業員は逃げていくし・・・」
「わかった、わかった。じゃあ俺はこれで帰るわ、明日早いんでな。あんまり飲みすぎるなよ。」
男はテーブルに金を置き、そそくさと店を出て行った。

伐折羅と呼ばれる男。
砂漠のはずれにある『ブルーメタル』採掘場の現場監督。
褐色の肌に男くさい体つき。今日も夜叉姫らに採掘場を荒らされヤケ酒を煽っている。
つい先日、彼女達を恐れた作業員達からストライキをくらい「なんとかしてくれ」と懇願されている。
そんな事言われなくても分かっている。これ以上被害が大きくなると本社から解雇されてしまうから。
かと言って何かいい方法がある訳でもなく、3ヶ月前に夜叉姫にむかっていって返り討ちにあっている。

きっかけは、彼が楽しみにしていた『サバクオオトカゲ』の干し肉を、夜叉姫らに無断で食べられたことだった。
やっとのおもいで『サバクオオトカゲ』を捕獲し、現場の事務所の軒下に熟成するまで吊るしていた。
毎日毎日、熟成具合を見るのが彼の楽しみになっていて、作業員がちょっと干し肉に触ろうもんなら烈火のごとく怒る。
そしてとうとう食べごろの時がきた。
いつもの様に干し肉の熟成具合を確認しようと事務所に行った所、あるはずの干し肉が無い。
え？え？半ばパニックになった彼は辺りを見渡し無くなった干し肉を捜している。
採掘場の廃棄された岩の上に、もう残りわずかになった干し肉をむしゃむしゃと食べている2人の少女達を見つけた。
それを見つけた彼は、落ちていたシャベルを持って獣の様な雄たけびを発し、一目散に岩の山を駆け上がった。
伐折羅は勢いよく持っていたシャベルを赤毛のショートの女の子に振り下ろしたが、ひょいと軽くかわされ、バランスを崩したところに少女の蹴りがはいり、ごろごろと岩山を落ちてしまった。

岩山の上では、きゃははと少女達が笑いながら彼を指差して笑っている。なんだか彼は情けなくなり涙が滲んできた。
それを見た夜叉姫は、伐折羅を指差して「やーい、涙目オヤジ～」とゲラゲラとお腹を抱えて笑っている。羅刹の方も「だめだよ～そんなこといっちゃ～」と言いながらもクスクスと笑っている。

それ以来彼は、（特に夜叉姫には）殺意に似た感情を持っている。
「あーあ。誰かなんとかしてくんねぇかな・・・」とポツリと呟いた。
それを聞いた酒場の女主人が、グラスを拭きながらクスリと笑い。
「いいじゃないか、私は好きだよあの子達。可愛らしくて明るくてさ。」
「けっ！なーにが可愛いもんか、あの悪魔のような餓鬼。」
吐き捨てるように言い放ち、グラスに残った酒をちびりと飲んだ。

店の奥に座っていた男が立ち上がり、ツカツカと伐折羅の横に立った。
「隣いいかい？」ポツリと言い放ち、伐折羅の返事も待たずにドカっと腰掛けた。
「なんだぁ？ここらじゃ見かけない顔だな。」
怪訝そうな顔して、伐折羅はジロジロと男を見ている。よく見ると男の向こうに小さな影がみえる。少女だ。
「おいおい、酒場に子供連れとはいただけないね。こんなとこに来ないでレストランにでも行きな。」
「こんな所で悪かったね。」
女主人が少しムッとして言った。そして少女の方を振り向きニコっと笑って。
「お譲ちゃん何か飲むかい？」
少女は少し考えて、男の方を見たが男は振り向かない。
「・・・お水。」

下を向いて怯えたような震える声で女主人に答えた。

「俺がなんとかしてやろうか？」

持っていたグラスをちびりと飲み、伐折羅の方を振り向かずに言い放った。

序章　3

二人の間に緊張感が走る。この男が冗談を言っているとは思わない。それほどこの男の発する凄みというか、雰囲気がある。だが、にわかに信じるほど伐折羅は馬鹿じゃない。そこですこしカマを賭けてみることにした。

「ば、馬鹿なこと言うんじゃないよ。あんた流れ者だろ？何も知らないってのは怖いな。」

伐折羅（ばさら）は精一杯笑って見せた。だが、背中に冷たい汗が流れる。酔いが一瞬で冷めるかのように。

「馬鹿な事だと思うかい？」

はじめて男は伐折羅の方を向いて、話しかけた。蛇に睨まれた蛙のように伐折羅は動けない。体の体温がみるみる下がっていく様な錯覚すらおぼえる。

「あ、あんた・・・本当にできるのかい？」

いまにも消えてしまいそうな、か細い声で男に答える。

「『本当にできるのかい』ねえ・・・ククク・・・」

爬虫類の様な笑い顔で、肩をゆすって笑っている。男はグラスの酒をグビリと飲んで舌なめずりをした。

「俺は、ザック＝レトリックって言うんだが、知ってるかい？それともこんな田舎じゃ俺の名前なんか知るわけないか？」

ザック＝レトリック。知っている、伐折羅はこの名前を知っている。

金さえ積めば、女子供さえ殺害するという冷酷な殺し屋。有名な話では、さる資産家が突然亡くなった。資産家の男は７０を超えて、自分より３０以上はなれた若い妻と結婚した。それから数年たってから突然男は死んでしまった。

資産家の男を良く知る者達からは、「まぁ、随分強引な方でしたからね。敵は多かったと思いますよ。」

最初彼の妻が疑われたのだが（実際は妻が、ザックに依頼していた）、男の葬儀の時の悲しみ方と、深い落ち込み方に世間は、彼女は本当に男を愛していたんだ、と思うようになり、彼女の容疑は段々消えていき、数年後、彼女は屋敷を出て消息不明となった。

すると後にこんな事が噂されるようになった。「彼を殺したのは、ザック＝レトリックじゃないか？」「ヤツならこんなことは他愛もなくやってのけるだろうな。」「じゃあ誰がヤツに依頼したんだ？」「あの人には敵が多かったから特定するのは難しいだろう。」

砂漠のオアシスの町にもこの話は伝わってきた。とうぜん伐折羅の耳にもはいっている、その男が自分の目の前に座っている。

「あ、あ、あんたが、あ、あのザック＝レトリック・・・」

もう完全に酔いは醒めた、確実に。

「ありがたいね、こんな田舎の町でも俺を知っているとは。」

ザックはグラスを伐折羅のグラスにカチンとあわせ、乾杯の様にグラスを軽く上げ飲んだ。

「で、どうだい？俺が何者か判ったところで改めて俺に任せてみないかい？」

伐折羅はゴクリと喉をならして。

「あ、あんたがやってくれるなら、良いも悪いもない。だが・・・あんたに頼むほどの金が無い。」

ザックはにやりと笑って、タバコに火を付けた。

「ああ、かまわねぇよ。見てのとおり今は娘を連れて旅行中だ。あんたが払える額と、ここの支払いでいい。」

「わ、わかった。あんたにヤツらの始末をたのむよ。ここの支払いはまかせとけ、残りの金は・・・」

ザックはスクリと立って、帰り支度をしている。伐折羅の肩に手を置いて、耳打ちをした。

「残りの金は2日後の夜でいい。土産にヤツらの首を持ってきてやる。」
「お、おいあんた、ヤツらの顔をしってるのかい？」
ザックはニヤリと笑ってタバコの煙をはいた。そして何も言わずにそのまま店を出て行った。その後ろに少女も付いて行く、ドアの近くまで少女が行った時、クルリと振向き伐折羅に近づいてきた。
「・・・」
伐折羅はきょとんとして、少女に話しかけた。
「な、なにかな？お、お譲ちゃん」
「お金は・・・お金は用意しなくていいよ・・・」
へ？どういうこと？と聞こうとしたが、少女は俯いたまま父親の元にもどっていった。
伐折羅は呆然としている。しばらくして我に返った。もしかしてとんでもないヤツと知り合ったんじゃないだろうか？
これ以上飲む気にもなれず、自分の分とザックらの支払いをして店を後にした。

町のはずれに2つの影。1つは大きく、もう1つは小さい。
「10日も銃を握ってないと勘が鈍ってきそうだ。全く、たかが餓鬼2人に何ビビってやがるんだ？だらしない連中だぜ。」
ザックは指をコキコキと鳴らしながら、タバコをふかしている。
「おい」
後ろをついてくる少女に振り返らずに話したが、返事が無いので少し苛(いら)ついた口調で。
「おい！呼ばれたら返事くらいしやがれ！全く気味の悪い餓鬼だぜ。」
少女はビクンと肩をすくめ、怯えた表情でザックに答えた。
「は、はい！・・・ご、ごめんなさい・・・パパ。」

ぷっとタバコを吐き捨て、乱暴に足でグシャグシャとタバコをもみ消した。
「で、どうだ？ヤツらの気配は感じたか？」
「う、うん・・・こっちの方向に。」
少女は北西の方向を指差した。
「ここから２０キロくらい離れた所に、小さな小屋がある。そこから2人の女の人の気配を感じる。」
ザックは少女が指差した方向を見て、ニヤリと笑い呟くように。
「そうか、そんなに離れちゃいねえな。まぁ違ったら違ったらで準備運動くらいにはなるか。」
人を殺すことを「準備運動」と言ってのける。これこそがザックが恐れられる所以なのだろう。
「よし、じゃあ行くとするか。」
ザックが目的地に向かって歩き始めたが、少女は立ち止まったまま。
「・・・」
少女がついてきていないのを気づいたザックは、またも苛ついて。
「おい！なにしてやがる。ついてきやがれ！」
恐れた目をしながらも、少女はザックの目を向いて言った。
「パパ・・・今回は止めた方がいいよ。じゃないと恐ろしい事が、パパに・・・」
もじもじと話す少女の言葉が終わらないうちに、ザックはツカツカと少女の近くに近づき、鬼の様な形相で睨(にら)みつけ拳(こぶし)で少女の顔面を殴りつけた。少女は地面に激しく叩きつけられ口から血を流している。ザックは少女の髪を掴み、持ち上げて脅すような口調で話す。
「お前、誰のおかげで生きてられるんだ？言ってみろ！」
髪の毛を掴んだまま、少女に平手打ちを繰り返す。少女の頬はみるみる真っ赤になっていく、そして血に染まった口を開き。
「パ、パパのおかげです・・・パパが居なかったら、ア、アリサはママと一緒に死んでいました・・・ご、ごめんなさいもう逆らいません・・・」

ザックは平手打ちをようやく止め、髪の毛を掴んだまま地面に打ちつけた。
「アリサ、よくわかってるじゃねぇか。こんど舐めた口叩いたらこの砂漠に捨てていくからな！」
アリサの頭を足で踏みつけ、悪魔の様な笑みを浮かべながら諭す様に言い放った。アリサは「ごめんなさい、許してください。」と何度も繰り返している。
「よし、わかったなら付いて来い。この仕事が終わったらぬいぐるみでも買ってやる。」
アリサは真っ赤に染まった顔で精一杯笑った。こういう優しさがあるからアリサはザックから離れない。もちろん1人では生きて行けないのもあるが。
「う、うん！ありがとうパパ！」
スクっと立ち上がり、ひょこっひょこと父親の後を付いて行く。

２つの影が砂漠へ消えていく、１つは大きく、１つは小さい。

序章　4

時間を遡って、伐折羅（ばさら）とザックが酒場で出会った頃。砂漠の小屋で2人の少女がきゃっきゃと騒いでいる。

「いーやーだー、今日は別に入らなくてもいいでしょ！」

夜叉姫（やしゃひめ）がテーブルの足にしがみついて、だだをこねている。羅刹（らせつ）は彼女の襟足を捕まえてグイグイと引っ張る。

「いい加減にしなさい！お風呂は毎日入るものなの！女の子なんだから毎日綺麗にしておきなさい。」

夜叉姫は顔をぷくーと膨らませて、羅刹の方を振向き、舌をだしている。

「やだもん！体洗うと、匂いが消えちゃう！」

「あんたは犬か！全く、毎度毎度同じことの繰り返しで！この後私がどう出るか・・・判らないあんたじゃないよね。」

羅刹は風呂嫌いの子犬から手を離し、拳をポキポキと鳴らしている。

「お風呂入ってきなさい・・・」

その殺気を感じとったのか風呂嫌いの子犬は、恐る恐る羅刹の方を見上げた。鬼がいる、そこに鬼がいる。

「い、いや、でも、あの、そ、その・・・」

ますます羅刹の殺気のオーラが大きくなっていく。まーだわからんのかこのガキはと言う感じで。

「入るの？入らないの？」

もう殺気のオーラで人が殺せそう。子犬はすくっと立ち上がり直立不動で、敬礼をした。

「入ります！入らせていただきます！」

すると殺気に包まれた小屋は、ぱあっと穏やかな空気に満ちていった。
「そう?よかった。ちゃんと肩までつかるのよ。体もちゃんと洗って下着も替えなさいよ。」
羅刹は夜叉姫に着替えを渡し、鼻歌を歌いながら夕食の準備にとりかかった。
「まったく、なんで毎日毎日風呂なんか入らなくちゃいけないのよ・・・」
夜叉姫が服を脱ぎながら、ぶつぶつ言っていると台所から殺気のこもった鬼の声が聞こえてきた。
「なんかいった?」
「いえ!何も言ってはございません!」
何で聞こえたの?と思いながらそそくさと服を脱ぎザブンと風呂につかった。

時間は現在にもどる。
砂漠の小屋の前に2人の人影。
「おい、ここで間違いないか?」
ザックは小屋を見据えたまま、連れの少女に語りかけた。
「うん・・・ここに2人の女の人の気を感じるよ。」
腫上がった目で父親の方を見ている、少し心配した目で。また余計なことを言うと父親の機嫌を損ねて折檻されてしまう。
「さあてと、まずこいつで挨拶してみるか。目的の餓鬼どもだったらいいんだけどな。」
ザックはカバンから発破(はっぱ)を取り出し、火を点けた。
「一発目で死んでくれるなよっと。」
火のついた発破を小屋の前に放り投げた。すると暫くしてしゅーとした音が消えてドカンと爆音が鳴り響いた。

小屋が爆風できしむ。小屋の中で料理を作っていた羅刹がぎょっとして。
「なに？なに？なにが起こったの？」
風呂に入っていた夜叉姫が服も着ずに、そのまま飛び出してきた。
「羅刹、大丈夫？これ、発破だよ。火薬の匂いがする。」
羅刹に声を掛けてそのまま表に飛び出していった。
「う、うん大丈夫って・・・こ、こらー服ぐらい着なさい！」
せめて下着だけでもと、羅刹は夜叉姫の後を追いかけた。
夜叉姫が勢いよく表に飛び出していくと、仁王立ちで暗闇を見据えた。そこに2人の人影が見える。こいつらか？
「おい！あんたらか？あたしたちの豪邸に発破を放りこんだのは！」
ザックはこのこ汚い小屋のどこが豪邸なんだ、と思いながら。夜叉姫に返答する。
「おー出ててきた、出てきた。どうやら無傷のようだな。」
銃に弾を詰めながら次の準備をしている。ちらりと小屋の方を見ると、全裸の夜叉姫が仁王立ちで立っている。彼はそれを見るとぶっと吹き出し。
「ああ、そうだぜ。ちょっとお前らを始末するように頼まれてな。恨みはないが死んでもらうぜ・・・っていうか、お前服着ろ！緊張感なくなるわ！」
夜叉姫は、はっと我に返り自分の姿を理解し、真っ赤になってさっと胸と股間を手で隠しうずくまった。
「きゃーきゃー！見るなーこのロリコン！」
ザックはムカっときた口調で。
「見るか！そんな凹凸の無い体！なにも感じるか！いいから服着て来い。それくらいの時間はやるから。」
そそくさと夜叉姫が小屋に戻る。続いて羅刹が表に出てきた。
「お？今度は凹凸のある女だな。まぁ餓鬼には変わりないけど。」
「ちょっと！なんなのよあんた達！私たちの豪邸をこんなにしちゃって！」

羅刹はザックらを指差して大声で怒鳴った。もちろん羅刹はちゃんと服を着ている。
ここらじゃ小屋の事を豪邸と呼ぶのか？呆れた顔で銃口をこめかみにあて、ポリポリとかきながら。また同じ事を言わなくちゃいけないのかと思い、はぁとため息をついた。
「ちょっと酒場で知り合った男から、お前らを始末するように頼まれてな。夜叉姫ってのと羅刹だっけか？お前らの事だろ？恨みはないが死んで・・・」
ザックが言い終わるのを待たずに、羅刹が冷静な声で話す。
「いくらで？」
「は？」
こいつらには緊張感ってのがないのか？初めてのケースにザックは調子が狂い始めてきた。
「確かにさっきの凸凹なしのガキんちょが夜叉姫で、ナイスバディ&ビューティな私が羅刹よ。だからいくらの金で私たちの始末を頼まれたの！？」

ザックはもう会話をするのが面倒になってきて、指を3本かざした。
「３０万？３００万？もしかして３０００万？いや、３０００万はさすがに無いか・・・いや最近私達の賞金が上がってきているらしいから３０００万って事もありうるかも・・・」
羅刹がぶつぶつ言っていると、ザックがため息をついている。一方アリサはきょとんとしながら父親と小屋の少女を繰り返しみている。彼女にとっても初めてのケース。父親に連れられて何度も仕事の現場を見てきたが、こんなことは初めてだ。アリサはすこし吹き出しそうになる。
「バーカ！３０００だよ３０００！俺とこいつの酒場での飯代だ。」
羅刹はザックの方を向いて目をぱちくりとさせた。
「３０００？３００００万じゃなくてたったの３０００ギル？ば、ば

っかじゃないの？たったの３０００ギルで私達を始末しに来たの？」
「ああ、たぶんそのぐらいだ。実際もうちょっと少ないかもな。」
ザックは羅刹に向かって銃をかまえる。もうこれ以上付き合ってられない、といった感じで。
「えー信じられない！そんな３流の殺し屋が私達を始末するですって？悪いこと言わないからとっとと帰りなさい。でないと酷い目に・・・」
言うや否や、ザックが銃の引き金を引いた。弾は羅刹のこめかみの横をすり抜け、豪邸といわれる小屋の壁に穴を空けた。
「きゃ！いきなりなにすんのよ！人がせっかく忠告してやってるのに！」
ザックは首をかしげた。おかしい。たしかに羅刹の眉間に標準をあわせたはずなのに。銃身が狂っているのか？

正確に言えば外れたのではない、羅刹が避けたのだ。四大賢者と言われる弥勒（みろく）の元で鍛えられた羅刹と夜叉姫にとっては、銃の弾をかわすなど道に落ちている馬フンを避けることとそう大差ない。するとそこへ着替え終わった夜叉姫が飛び出してきた。
「銃声がしたよ！？羅刹だいじょうぶ？」
「大丈夫、大丈夫。私があんな弾に当たるわけないでしょ。それより聞いてよ、あいつ私達を３０００ギルで始末するんだって！」
夜叉姫は顔を真っ赤にして怒りをあらわにした。
「３０００だって！そんな世間知らずな殺し屋さんは懲らしめないとね。羅刹、わたしが相手するよいいよね？」
「うん、まかせた。殺しちゃだめよー」
羅刹は夜叉姫に、いってらっしゃいといい、手を振っている。夜叉姫はツカツカとザックの元に歩み寄っていく。
「てめえ、丸腰じゃねえか。いくらなんでも丸腰の餓鬼は相手しねぇ。なんでもいいから武器になるもの持ってきな！つるぺたちゃん。」

夜叉姫はムッとした。その瞬間ザックの顎に激痛が走り、体が宙に浮いた。彼は何をされたか理解できない。夜叉姫が目にも止まらぬ速さでザックの顎に前蹴りを放ったからだ。

「だれが！」

夜叉姫が腰を深く落とし、拳をくりだす。ザックの体がくの字に曲がる。

「つるぺた！」

かかか、と苦悶の表情を上げているザックのこめかみに回し蹴りを放った。

「じゃー！！」

この間わずか数秒。夜叉姫は汗ひとつかいていない。地面に倒れこんだザックは胃の中の物をすべて吐き出し唸っている。

夜叉姫は鼻息を荒くしながら。

「失礼なヤツめ！お年頃の乙女をつかまえて。凹凸がないとかつるぺたとか、風呂嫌いの犬とか、チンチクリンとか。」

後半のは俺はいってねえ、と思いながら意識が飛びそうなのをこらえている。小屋の方から羅刹の声がする。

「ちょっとーやりすぎちゃだめよー」

「うんわかってるよー軽くひねっただけだからー」

軽くひねっただけだと？冗談じゃねえ、こいつバケモノだ。夜叉姫は拳をあわせポキポキと鳴らしている。こいつ、とどめを刺すつもりか？彼女にはどどめを刺すつもりは無い。わざと拳をはずし相手に恐怖を植え付ける。そうすることで2度と彼女らに向かってこない。

拳を振り上げた夜叉姫の前に1つの影が現れた。アリサだ。

ふるふると震えながら夜叉姫を睨みつけ、両手を大きく広げ父親を庇っている。夜叉姫はその行動にすこしたじろいた。

「パパを・・・パパをいじめないで！！」

アリサが叫ぶと地面がふるふると震えだした。地震？いや、震えて

るのはアリサと夜叉姫の周りだけ。するとアリサの周りにある小石が宙に浮き出し、夜叉姫に向かっていった。
始めは避けていた夜叉姫だが、あまりの数の多さに避けきれない。
「え？え？何？何なのこの子？」
痛くは無いのだが、こう無数に小石が飛んでくると鬱陶(うっとお)しくてかなわない。
小屋からその状況を見ていた羅刹が、驚いた表情でつぶやいた。
「な、何なのあの子・・・まさかサイキッカー？」
夜叉姫にぱしぱしと無数の小石があたる。暫くして当たる小石の数が減ってきた。そうしてポトポトと小石が地面に落ちていった。
時間にして4～5分といったところか。するとアリサは力尽きたのか地面に倒れ気を失った。

「うー、びっくりしたあ・・・何が起こったっていうのよ・・・」
夜叉姫は体に付いた埃をぱんぱんと叩きながら、倒れこんだアリサをじっとみている。するとそこへ羅刹が駆け寄ってきた。
「大丈夫？夜叉姫。」
「あたしは大丈夫だけど、この子が。羅刹この子いったい何なの？」
羅刹は腕組をしながら倒れこんだアリサをジロジロみている。
「私も判らないわよ・・・たぶん弥勒様が言っていたサイキッカーじゃないかと・・・あー！」
周りを見渡すと3人しかいない。夜叉姫、羅刹、倒れこんでいるアリサ。いないのだ、このどさくさに紛れてザックは体力を回復させ逃げ出したのだ。
「しんじらんない！自分の娘を置き去りにして逃げるなんて！」
「え？この子あいつの娘だったの？」
夜叉姫は、うんと頷いてしゃがみこみ、アリサの顔に耳を近づけた。
「大丈夫みたい。気を失ってるだけみたいだよ。」
「とりあえずこの子、小屋に運ぶわよ。手当てしてあげないと。」
羅刹はひょいとアリサを抱きかかえ、小屋に戻っていった。

一章の1　弥勒様に会いに行こう！

羅刹はおぶってきたアリサを自分のベットへ寝かせた。アリサはこんこんと眠っている。

「ふぅ、とりあえず今日はここに寝かせましょう。」

アリサにタオルをかけてやり、羅刹は彼女の頭を優しくなでている。夜叉姫は心配そうにアリサをじっと見ていた。

「羅刹ぅ・・・この子大丈夫かなぁ・・・・」

羅刹は夜叉姫を自分の胸元に抱きしめ、優しく語りかける。

「大丈夫よ、夜叉姫。そんな不安な顔をしないで。」

羅刹と夜叉姫はアリサの事が心配でたまらない。もちろん彼女の体の事も心配なのだが、親に見捨てられたという事実を彼女はこれからどう受けとめていくか、そのほうが心配なのである。アリサが目を覚ました時にこの事実を話すべきか。

「この子、顔中傷だらけ・・・あいつにやられたのかな・・・」

「だとしたらとんでもない親ね。」

夜叉姫の目には涙が滲んでいる、羅刹の目は怒りに震えている。夜叉姫も羅刹もアリサと同じく親に捨てられた経験があるから。

一夜たちまだアリサは目を覚まさない。時折うなされて、「パパ！パパ！」と叫んでいる。夜叉姫は「大変！大変！」とオロオロするばかり。羅刹は濡れたタオルでアリサの汗を拭いている。

「どうしよ！どうしよ！この子死んじゃうよ！死んじゃうよ！」

手をわきわきしながら、小屋中を走り回る夜叉姫を羅刹はたしなめるように。

「もう！うるさい！バタバタしたってしかたないでしょ！まったく！」

えーでもぉ、とバタバタと走り回るのを止めたが、手はまだわきわ

きしている。
羅刹は、なにかいい方法は無いものかと考えている。そこではっと閃いた。
「そうだ！弥勒様！弥勒様に診てもらおう。」
夜叉姫はわきわきを止め、おーと感嘆の声を上げた。
「そうだね、弥勒のじっちゃんなら絶対なんとかしてくれるよ！」
「そうと決まったらすぐ行くわよ！夜叉姫、車の準備して。」
羅刹はアリサをタオルに包み、大事そうに抱えた。夜叉姫は車を小屋の前までまわした。
「羅刹、いつでも出れるよ！速く乗って。」
羅刹は車に飛び乗った。胸元にはアリサを大事そうに抱えて。
「よし、出して。あんまり飛ばさないでね、この子が乗ってるから。」
「うん！わかった。しっかり捕まっておいてね！」
夜叉姫が勢いよくアクセルを踏んだ、車は砂煙をかきあげて砂漠を疾走した。
「ちょっと！なにがわかったのよ！飛ばすなっていってるでしょ！このバカー！」
車は砂漠を砂煙を勢いよくあげて疾走する。弥勒の元へ向かって。

車を疾走させる事、約1時間。枯れた大木の前で夜叉姫は車を止めた。周りには大木以外何も無い。
「おーし、着いた、着いた。弥勒のじっちゃんいるといいけどな。」
夜叉姫が車から飛び出した。続いてアリサを抱きかかえ助手席から羅刹が降りてくる。
「いると思うけどな、あの方、出不精だから。」
すると、どこからともなく声が聞こえてきた。威圧する様な地面から響き渡る声が。

「汝ら、道に迷ったなら素直に立ち去るがよい。この先に様があるのならこの宮毘羅(くびら)が相手に・・・おお、これはこれは。夜叉姫様と羅刹様ではないですか！」

威圧する様な声が、夜叉姫らを見つけたとたんに軽いトーンに切り替わった。

夜叉姫らの目の前に、身の丈３Ｍはあろうかという大男が現れた。手には男の身長を越す槍を持っている。

「やっほー、宮毘羅くん！　ひさしぶり。相変わらずお仕事がんばってるね。」

「宮毘羅さん、お仕事お疲れ様です。」

夜叉姫が手をあげてぶんぶんと振り回している。羅刹はぺこりと会釈をした。

「お２人ともお元気でしたか。さ、さ、早くお入りください。弥勒様もお喜びになられます・・・ん、羅刹様。その抱えてる者は誰ですかな？」

アリサの事を言っているのだろう。急に警戒するような口調になる。

「この子病気なんだよ、弥勒のじっちゃんんに診て貰おうと思ってさ。」

宮毘羅は、警戒心をさらに強めた口調で話す。

「なりませぬ、なりませぬ。弥勒様の許可無きものをこの先に通す事はできませぬ！それが判らぬお２人ではありますまい。」

「それは判っています！でも、私達じゃどうする事もできないの。お願い、宮毘羅さんここを通して下さい。」

「お願いだよ宮毘羅くん！でないとこの子死んじゃうよ。」

宮毘羅は決して折れない。まぁ、門番がお願いされてひょいひょいと他者を入れていれば門番の意味が無い。宮毘羅は仕事に忠実なだけ。

「なりませぬ！この屋敷に災いをもたらすものを排除するのが我(われ)の勤め。どんなに頼まれても弥勒様の許可無き者は通すわけにはいきません！」

「お願い」「なりませぬ」の押し問答が10分ほど続いた頃だろうか、またどこからともなく声が聞こえてきた。軽い脱力感たっぷりの声が。

「いいよ～宮毘羅～入れてやんな～」

宮毘羅は声とは対象的に緊張感たっぷりの声で。

「弥勒様、良いのですか？」

「かまわねえよ～（ズズッ）その子から邪気は感じ取れないしな～（モグモグ）いいから入れてやんな～ゲフッ」

3人とも目が点になっている、それまでの緊張感が嘘だったかのように。宮毘羅がはっと我に返る。

「そ、それでは中にお進みください。」

宮毘羅は槍を高く上げ、槍の柄を地面にドンドンと2回打ち付けると、空間に大きな穴が空いた。穴はぽわっと光っている。

「さ、さ。お入りください。」

羅刹は宮毘羅を見上げて、申し訳なさそうに。

「ごめんなさいね、宮毘羅さん。わがまま言って・・・」

と、深々と頭を下げた。宮毘羅は真っ赤な顔をして両手をぶんぶん振り回し少し困った顔で。

「め、滅相もございません！これが我の務めですし。羅刹様、頭を上げてくだされ。」

羅刹はにこっと笑って光のなかに進んでいった。今度は夜叉姫が拳を突き上げて、宮毘羅を見上げて話しかける。

「宮毘羅くん、また組み手の相手お願いね！約束だよ。」

「はは、今度は負けませんぞ。この前と違って鍛えておりますからな」

ニコリと笑い、羅刹に続いて光の中に入っていく夜叉姫を見送った。3人が中に入ったのを確認したかのように、光の穴は小さくなっていった。それに続いて宮毘羅も姿を消した。

光の中を抜けると一面の花園。外界とは全く対照的に鳥が鳴き、蝶がひらひらと舞っている。

先に進むと小さな小屋がみえる、小屋というより庵といったほうがいいかもしれない。そこの入り口に誰かが立っている。

「やあ、夜叉姫ちゃんに羅刹さん。ひさしぶりだね、弥勒様が待っているよ。さ、中に入って。」

「あ、順風耳(じゅんぷうじ)先生。やっほー元気してた?」

順風耳と呼ばれている男。

すらりと背が高く端正な顔立ち、耳が大きく常に目を閉じている。盲目という訳では無いが気配を常に耳で感じ取れるので、眼を使う必要が無いと思いずっと閉じたままである。弥勒の側近であり話し相手でもある。

「また・・・夜叉姫ちゃんそんな言葉使いを・・・もうすこし女性らしくなさい。」

順風耳はふうとため息をついた。夜叉姫はそんな彼を見て、にひひと笑っている。

「まったく・・・私の教育が間違っていたのでしょうか・・・羅刹さんと同じようにしてきたはずなんですけどね・・・」

夜叉姫と羅刹がまだここで暮らしていた時、彼は彼女等の教育係だったのだ。勉強好きで読書家の羅刹とは対象的に夜叉姫は庭を走り回ったり、弥勒と組み手ばかりしていた。たまに順風耳とも組み手をするのだが、終わると必ず勉強させられるので夜叉姫は数回しか彼とは稽古をしていない。

「順風耳先生、おひさしぶりです。」

羅刹はアリサを抱えたまま、順風耳に会釈をした。すると彼も会釈をし羅刹に微笑んだ。

「羅刹さん、久しぶりですね。ますます女性らしくなって。」

彼女は顔を真っ赤にして、照れている。羅刹が顔を真っ赤にして照れるなんて滅多に無い。

「いやだわ、もう～先生ったら。そんなセクシー&クールビューティだなんて～まあ、ちょっとは自身ありますけどー改めて言われると照れちゃいますよ～」

そこまで言ってませんよと、突っ込みを入れそうになったが、ははは と引きつった笑いを浮かべている。この子の暴走癖も直っていないなと。彼は羅刹が大事そうに抱きかかえているアリサの方に顔を向けた。

「ふむ、この子ですね・・・今のところ命に別状はありませんが、酷く衰弱していますね。はやく弥勒様に診て貰いましょう。」

順風耳に続いて、夜叉姫、アリサを抱えた羅刹と庵の中に入っていく。長い廊下を進んでいくと大きな扉があり、そこで彼らは立ち止まった。

「順風耳です。弥勒様、夜叉姫ちゃんと羅刹さんを連れてきました。」

中から、おうと声がすると大きな扉が音も無く開いた。彼らが中に入るとそこには老人がいる。

「やっほ～よくきたな～まぁこっちこいや～（ズズッ）」

一章の2　般若よ！文句ある？

部屋の中央で弥勒（みろく）が麺を食べている。彼の横にはどんぶりが5～6杯積まれている。そこへ順風耳（じゅんぷうじ）がツカツカとやってきて。

「弥勒様！ここで食事をしてはいけません！何度も言ってるでしょう、食べるなら食堂で食べてください。」

弥勒は怒られ慣れているのか、順風耳の忠告もどこ吹く風。彼の方を見ようともせず、食べ続けている。

「うるせえなあ～いいじゃねえか～どこで飯くったって～モグモグ」

順風耳は腰に手を当てて、一旦ふうとため息をつき、一気にまくしたてた。

「いいですか、あなた様はこの世界にたった4人しかいない大賢者の1人なのですよ？もうすこし威厳をもっていただかないとこまります！いいですか？そもそも大賢者に選ばれし者の振舞い方というものはですね・・・」

お説教がクドクド続いてる。順風耳のお説教を、またかよと言いたげな顔でどんぶりを平らげ、ぱんと手を合わせて。

「ごっそさん。いやー食った食った。ゲフ！」

箸の先を爪楊枝がわりにして、ちっちと掃除している。弥勒は入り口に立っている夜叉姫（やしゃひめ）達を見て、たちあがり彼女らの元へ歩いていった。

「よう、ひさしぶだなあ～元気しとったかあ～」

弥勒は、すっと手を上げて軽く挨拶した。夜叉姫がその手に向かって、ぱちんと手を合わせてハイタッチをした。

「うん！元気だよ。弥勒のじっちゃん！じっちゃんは相変わらずだ

ね。」
「おう～あたぼうよ～変わってたまるけい！」
2人は顔を見合わせて、にひひと笑っている。その横で羅刹(らせつ)がお辞儀をしている。
「弥勒さま、おひさしぶりでございます。お元気そうでなによりですわ。」
「羅刹～堅苦しい挨拶は無しにしようぜ～それはともかく、暫(しばら)く見てないうちに育ったな～」
羅刹を上から下へジロジロと見て、後ろにまわり羅刹のおしりを、さわさわと触った。羅刹は、きゃ！と声を上げ身をよじった。
彼女はこめかみを、ピクピクさせながら。
「もう！嫌ですわ、弥勒様ったら！」
と、言うが早いか彼女は足を高々と上げ、弥勒の脳天にかかと落としをくらわせた。
「ぐふっ！お、お、お・・・」
弥勒は頭を抱えてうずくまっている。痛みが引いて第一声。
「おめえなあ～仮にも大賢者の頭に、かかと落としをくらわせるなんて、どういう了見だい。」
「どこの世界に尻を撫でまわす、大賢者がいるんじゃ！」
ぷんぷんと頬を膨らませ怒っている。その横で夜叉姫が、げらげらと笑っている。

羅刹はこんな事をしてる場合じゃないと思い、気を取り直し真面目な顔で弥勒に訴えた。
「そんな事より、弥勒様！この子を診てあげてください。私らじゃ何にも出来なくて・・・」
弥勒もまた真面目な顔をして、アリサの顔を覗き込み額に手を置いた。
「うーむ。酷いな・・・ここに連れて来て正解じゃったな、そのままにしておいたら2日後には死んでおったかもしれんのお～」

「え！え！？大丈夫だよね！じっちゃんが何とかしてくれるよね！」
夜叉姫が弥勒の服の袖を、ぐいぐい引っ張りながら泣きそうな声をしている。
「大丈夫じゃよ、なんとかしてやる。ところで、この子はおめえらの友達か？」
夜叉姫と羅刹は顔を見合わせて、困った口調で弥勒に答えた。
「友達ってわけじゃないんですけど・・・」
「なんじゃ？詳しいことを話せ。」
羅刹と夜叉姫はこれまでの経緯を、包み隠さず弥勒に話した。
「それと、この子サイキッカーかもしれないんです。」
「サイキッカーじゃと？」
「そうなんです。夜叉姫に向かって、手も使わずに無数の小石を飛ばしてきました。おそらく書庫で読んだサイキッカーかと。」
弥勒は顎に手を当てて、うーんと唸っている。
「多分あれじゃな、元々この子にはその力があったんじゃろ。自分の親を守りたいと思う強い気持ちが強くなり。限界以上の力を出してしまったんじゃろうな。その反動で体が衰弱してしまったんだろう。」
羅刹は、うんうんと頷いている。夜叉姫はわかった様なわからない様な顔をして、つられて頷いている。
「よし、わしが奥の部屋で診といてやる。こっちへよこしな。」
羅刹は、大事そうに抱えていたアリサを弥勒に渡した。弥勒もアリサを大事そうに抱え2人を真剣な顔で見つめた。
「おまえさんら、この子と友達になりたいか？」
2人は間を置かず真剣な表情で、こくりと頷（うなず）いた。それをみた弥勒は、にこっと笑って。
「うんうん、わかった。わしが絶対なおしてやるよ～」
元の軽い口調にもどって、奥の部屋に歩いていった。そして順風耳に話しかける。
「おい、順風耳。順風耳よ～」

「・・・であるからですね、そもそもこの世界の成り立ちにおける、大賢者のあり方というものはですね・・・は、はいっ！」
こいつまだ説教してやがったのか、と思いながら順風耳に話しかける。
「わしは、奥の部屋でこの子の治療をしてるから～その間あいつらの相手しておいてくんな～」
順風耳は背筋を伸ばし、深々と礼をしながら。
「はい！かしこまりました。」
ひょこひょこと弥勒はアリサを抱え、奥の部屋に消えていった。
順風耳は、こほんと咳払いをして2人に向き合った。
「さ、それでは久々にお勉強いたしましょうか。2人がここをでてから外界（がいかい）でどんな経験をしてきたか、お話していただきますね。」
夜叉姫がそれを聞いたとたん、忍び足で逃げ出そうとする。それを感じとった順風耳は。
「羅刹さん」
「はい。」
羅刹が夜叉姫の襟首を、がっと掴みずるずると順風耳の後につづいて歩き出した。
「やだやだ～せっかくここに来たんだから、お庭で遊びたいよ～」
「お勉強が終わったら、思う存分遊んでもらっても結構ですよ。」
ぶーぶーと言いながら夜叉姫は引きずられていった。

奥の部屋に着いた弥勒は、アリサをベッドに寝かせ、上着を脱がせた。彼女の体を見て弥勒は、ぎょっとなった。
「な、なんだいこりゃ・・・ひでえな・・・」
アリサの体には無数のアザがあった。新しいもの、古いもの、様々と。
「こんな、夜叉姫より幼い子に・・・ひでえ父親だな・・・」

弥勒の顔が怒りにも似た真剣な表情になった。そして指をアリサの額にあてて、ぽつりと包み込むような声で。

「お譲ちゃん。すまねえが、お前さんの過去をちょっと見させてもらうぜ。」

額に当てた指先が、ほわっと光る。弥勒は目を閉じ、神経を集中させた。

時間にすれば数秒といったところか。指先の光がすうっと消えていく。そして弥勒の目尻から一筋の涙がこぼれた。

「なんてこったい・・・この幼さで地獄のような日々を耐えてきたもんだ・・・羅刹と夜叉姫もそうとうな思いをしてきたが・・・」

夜叉姫も羅刹も、ここに来た時に弥勒に過去を見られている。その辛い過去を見て彼女らをここに住まわせた。

弥勒は、薬箱をとりだしごそごそと目当ての薬を探している。そして1つの薬を取り出し、すこし躊躇(ちゅうちょ)したような顔で。

「これぱっかりは使いたくなかったが・・・しかたねえ。あいつらが、おまえさんと友達になりたいっていうんでな。」

薬を湯飲みに入れ、お湯で溶いた。アリサの頭を持ち上げ、こくりこくりと飲ませる。

「たのむぜ、おまえさんが生きたいと思う気持ちが強ければ、2時間くらいでアザも消えて目を覚ますはずだ。」

アリサはさっきまでうなされていたが、暫くして、すうすうと寝息をたてだした。

「ふむ、まずは成功というところじゃな。どれわしも暫く寝るとするか。おっと、その前におまえさんに名前をつけてやろう。ここに来たからには、いままでの名前は捨ててもらうからの。」

弥勒は暫く考えて、ぴんと閃いた顔をした。

「般若(はんにゃ)、般若じゃ。これからおまえさんは、般若と名乗るがよい。」

我ながらいい名前だと思い、目を閉じて眠りについた。

弥勒が眠りについて丁度2時間たったころだろか。アリサは目を覚ました。
なんだか悪い夢を見ていた様に気分が悪い、でも妙に頭がスッキリしている。まわりをきょろきょろ見渡して暫く考えた。ここはどこ？っていうか、わたしはだれ？え、え？なんにも思い出せない。頭がスッキリしているけど、こんなスッキリなしかたってある？
半ばパニックになっている、横を見ると見知らぬじいさんが自分の横で寝息をたてている。
そして自分の姿をみると、上着の前がはだけて肌をさらしている。
状況を理解した彼女は真っ赤になって大きな声で叫んだ。

冥界（めいかい）の怪鳥が、死を迎える時の断末魔（だんまつま）の様な雄叫びが小屋中に響き渡った。もちろん書庫にいる3人にも聞こえた。
「何事ですか！」
順風耳が、すくっと立ち上がり声が聞こえた方へ向いた。耳で全ての気配を感じ取る順風耳、即座に声が聞こえた方を感じとった。
「弥勒様がいる奥の部屋からですね。弥勒様に何かがあったのかも知れません、行きましょう2人とも！」
夜叉姫と羅刹が、うんと頷き、3人は書庫を飛び出した。
順風耳は嫌な予感がした、冥界の鬼達が目を覚ましたのではないだろうか？いや、あれからまだ２００年しか経っていない。こんなに早く目を覚ますはずが無い。もし鬼が目を覚ましていれば私達だけで太刀打ちできるだろうか？色々考えているうちに奥の部屋の前に着いた。
3人は勢いよく扉を開け、叫んだ。
「弥勒様！ご無事ですか！」

そこには冥界の怪鳥兼、冥界の鬼が、弥勒に部屋のありとあらゆ

る物をぶつけている。
「きゃーきゃー！あっちいけースケベじじい！」
弥勒は、身を屈めて飛んで来た物から身を守っている。
「ちょとまって、まってって言ってるじゃねえか。いたたたた。話し聞けってば。」
羅刹と夜叉姫が、アリサの元に駆け寄った。
「大丈夫だから、ね、ね。落ち着いて。」
羅刹がアリサをなだめている。落ち着きを取り戻したアリサは、うわーと泣き出した。
「おーそーわーれーた～。こんなじじいに、犯された～うわーん！」
部屋の入り口で、呆然と立ち尽くしている順風耳が呆れたようにぽつりと。
「弥勒様・・・あなた一体なにやってるんですか・・・」
すると夜叉姫が、弥勒をなんとかフォローしなければと思い。
「心配しなくていいよ。じっちゃんは１６歳以下は相手しないから！だから何にもされてないよ。ね！じっちゃん。」
我ながら上手くフォロー出来たと思った。が、部屋の空気が一気に凍りついた。
「おまえら・・・いいかげんにしろよ。わしはその子を治療していただけじゃ！その証拠に体のアザが消えているじゃろう。」
羅刹と夜叉姫が、アリサの体を見た。ほんとだ、綺麗になって透き通る様な肌の色になっている。
「さすが、弥勒様。」
「おー、やっぱりじっちゃんはすごいな！」
弥勒は、胸を張り得意満面な顔をしている。アリサはちょっとバツの悪そうな顔をして。
「で、でも。アザだけ消せばいいでしょ！記憶まで消すことないじゃない！」
アリサを除いた４人がキョトンとした顔をしている。夜叉姫、羅刹、順風耳の３人が弥勒を見つめた。

「へ？記憶が消えちゃったの？うーん・・・まぁ薬の副作用じゃな。気にするなそのうち思い出すわい。かっかっか。」
おいおい、笑いごとじゃないだろう。と弥勒を除いたみんなが思った。羅刹がうーんと唸っている。
「でも、こまったわね。名前がわからないんじゃ・・・」
弥勒が、こほんと咳払いをして話し出した。
「あーそれなら心配いらんぞ。そやつの名前は・・・」
弥勒の言葉をさえぎる様に、アリサがぽつり。
「は。」
夜叉姫が首をかしげて、聞きなおす。
「は？は、って何？」
アリサは思い出す、眠っていた時に優しさに包まれた声で聞いた一つの言葉を。間違いないそれは私の名前だと言うこと。
もし違っていても、それを名乗ることになんら恥ずかしさなどない。だから胸を張って言える。

「わたしは、般若よ！文句ある？」

一章の3　ASHURA

般若はベッドの上で仁王立ちになり、鼻息荒く腰に手を当てみんなを見渡している。
みんな目が点になっている、最初に切り出したのは羅刹だった。
「わ、わっかた、わかったから般若。と、とりあえず服きましょうか？」
般若はふと我に返り顔を真っ赤にして、ばっとしゃがみこみシーツに包まって小さくなった。
「はーい。これから着替えるから、先生とじっちゃんはとりあえず部屋をでていって。」
順風耳と弥勒は、夜叉姫に部屋から押し出された。順風耳が部屋の中の彼女らに聞こえないように話しかけた。
「またやりましたね。」
「ん～なにがあ～？」
またとぼけて、と思ったが口には出さない。ただクスリと笑って話を続けた。
「あの子達、仲良くやってくれるといいですね。」
弥勒は、ニコリと笑い空を見つめている。
「なあに、心配するこたあねえよ。やつらは出会うべくして出会ったんだ。運命ってやつだな、これから大変だぜ～やつら。」
「それでは、彼女等にあれを託すわけですか・・・これは大変な事になりそうですね。」
ぶちっと鼻毛を抜き、順風耳に向かって、ふっと吹きかけた。順風耳はそれを察してさっと避けた。
「・・・大丈夫だよ、あいつらならやってのけるさ。」

弥勒と順風耳は共に空を見つめている。彼女等の幸せを願って。

「よし、着替え完了。うん。可愛い、可愛い。」

般若は羅刹の見立てで服を着替えた。肩まで伸びた髪は青みがかった白色、日に当たると銀色の様にキラキラ光っている。ビキニのトップに、下はショートパンツ。首元にバンダナを巻いている。このバンダナは羅刹のお気に入りで、夜叉姫は手首に、羅刹は額に巻いている。3人おそろいである。般若はおなかを、さわさわと触って恥ずかしそうにしている。

「おへそでてる、なんか恥ずかしいな。ま、まあ。わたしにかかったらどんな物でも似合うけどね。」

この子、こんな感じだったっけ?と2人は目を、ぱちくりさせている。

「それじゃ自己紹介ね。私は羅刹。これからよろしくね、般若。」

「あたしは夜叉姫だよ。よろしくね、般若~。」

2人は般若に手を差し出した、般若は少し照れて握手をした。そしてちょっと照れくさそうに話した。

「羅刹と夜叉姫ね、わ、わかったわ。よろしくしてあげる。これからわたしがリーダーだからね!いいかしら?」

般若は腕を組んで、ふんと胸を張って威張っている。それを見た夜叉姫と羅刹は、ぷーと吹き出した。

「きゃははは。般若っておもしろーい。」

「だ、だめよ夜叉姫、笑っちゃ・・・くくく・・・あーお腹いたい。」

般若は顔を真っ赤にして、2人をぽかぽかと叩いた。

「なに笑ってるのよ~2人とも~もう失礼しちゃうわね!」

3人が部屋で騒いでいると、扉が開いて弥勒と順風耳が入ってき

た。２人は般若をみてにこにこ笑っている。
「すっかり元気になりましたね、般若ちゃん。私は順風耳です、これからよろしくね。」
般若は順風耳の元へ、さっと駆け寄りぺこりとお辞儀をした。
「はい、おかげさまで元気になりました。これからよろしくお願いしますぅ。」
なに?この変わりようは。２人が思っていると弥勒が、こほんと咳払いをした。
「おーなかなか似合っているじゃねえか～わしは弥勒だ、四大賢者のひとりで・・・」
弥勒が話しているにもかかわらず、般若は一切見ようとしない。順風耳の方を、きらきらした目で見つめている。
無視されているのに気づいた弥勒は、般若の方を向いて一言。
「おい・・・」
般若は弥勒を凍るような目で見つめた。汚いものでも見るように。
「なによ。」
「なによ、っておまえ。わしがおまえさんを治療してやったんじゃろうが!ちょっとは感謝せんかい。」
「ふんだ。わたしが気を失ってるのをいい事に、いたずらして。しかも記憶まで消しちゃったジジイに感謝なんかするもんですか!」
まぁまぁと２人の間に順風耳が割って入った。彼は般若に言って聞かせた。
「般若ちゃん、いいですか。この方はこの世界で４人しかいない、大賢者の１人なのですよ。弥勒様がいなければあなたはこうしていなかったのです。形だけでも感謝してあげてください。」
「わ、わかりましたわ。順風耳様がこう言ってるから感謝してあげる。感謝しなさいよ!」
なんで、感謝されて感謝しなきゃなんないんだ、と思い。悲しくなってきた。そこですかさず夜叉姫が口をはさむ。
「だからー、じっちゃんは般若になにもしてないってば。じっちゃ

んは16さ・・・」
羅刹が夜叉姫の口を押さえる、もうこれ以上話をややこしくしないでというふうに。夜叉姫は口を押さえられて、もごもごしている。

「ふん、まぁええわい。3人ともこっちへきな、話がある。」
弥勒は真面目な顔になり、踵(きびす)をかえし歩いていく。4人もそれにならって後に続いて歩いていく。長い廊下を歩いて行き、辿(たど)り着いたのは大広間。そこの中央に弥勒は、どかっと腰を下ろし胡坐をかいた。つづいて順風耳は弥勒の傍らに立つ。弥勒の対面に右から、羅刹、夜叉姫、般若が、ちょこんと座った。
弥勒は顎を、ぽりぽりとかき夜叉姫と羅刹に話しかけた。
「羅刹、夜叉姫～おめえら、ここを出て何年になったっけ～?」
「3年になります、弥勒様。」
羅刹が背筋を伸ばして答えた。弥勒は腕を組み暫く考えた後、ポツリと言う。
「ところで、ブルーメタルは集まったかい～?」
夜叉姫は、ごそごそとショートパンツのポケットに手を入れて、弥勒の前に差し出した。
「これだけなんだ、じっちゃんに言われたとおり集めたんだけどさ・・・なかなか見つけられなくて。」
持っていたブルーメタルを弥勒に手渡した。貰ったブルーメタルを弥勒は、しげしげと見つめている。羅刹がそれを見てたずねた。
「弥勒様。このブルーメタル集めに何か意味でもあるのですか?」
弥勒は羅刹の方を、ちらっと見た。だがすぐさまブルーメタルの方に目を向けた。
「意味?意味なんかないよ～」
羅刹と夜叉姫は、びっくりした顔で弥勒にくってかかった。
「ひ、酷いです、弥勒様!意味も無いのにこんな物を3年も集めさせたなんて!」
「そうだよ、じっちゃん!大変だったんだからね。殺し屋に狙われ

たり、あたしたちに賞金がかけられたり！」

２人がぶーぶー言っていると、順風耳が割って入った。

「まぁまぁ、２人とも落ち着いて。駄目じゃないですか弥勒様、ちゃんと説明しないと。」

そのよこで般若が、むすっとした顔でみんなを見ている。怒った口調で話す。

「ちょと、何言ってるのかわかんないわ！そのブルーメタルってのは何なのよ？わたしにも説明してよ。」

「そ、そうですね。般若ちゃんは判らないですね。それでは改めて説明したしましょう。」

順風耳は襟（えり）を正して、それではと教師のように説明をはじめた。

「私達が住むこの世界、『三千大千世界（さんぜんだいせんせかい）』には様々な鉱物があります。そのなかで最上位にあるのが『ブルーメタル』なのです。この金属は、基本的には金剛石と同じく宝飾品として扱われるのですが、一定の薬品を加えることによって金属と同じ性質に変化します。別名『奇跡の鉱物』とも呼ばれ、その利便性から頻繁に使用されることになりました。」

般若は真面目に、羅刹と夜叉姫は初めて聞く話ではないが彼女らも般若にならって、真剣に説明を聞いている。

「ですが、ここ５０年乱獲がたたり、以前のようには採掘されなくなりました。１０００以上あった採掘場も、いまでは１０も満たないぐらいに減少しています。今では『奇跡の鉱物』が『幻の鉱物』と呼ばれ、１００ｇもあれば一生遊んで暮らせるほど貴重になりました。」

般若がすっと手を上げて、順風耳に質問した。

「順風耳様、じゃあどうして羅刹たちはその『ブルーメタル』を集めてるの？一生遊んで暮らしたいから？」

順風耳は、にこりと微笑み、手を出して横に振る。

「いえいえ、そういう訳ではありません。」
夜叉姫と羅刹は目を大きく開いて、びっくりしている。え、違ったの？といった感じで。順風耳は少し呆れた顔をして話を続けた。
「全く・・・あなた方には説明したでしょう。ブルーメタルの現物を見て、その性質と採掘場の近辺から出る、他の鉱物の調査をしてくださいって。」
羅刹たちは、はっと思い出した。そういえばそんな事を言われたような、２人は苦笑いをして頭を、ぽりぽりかいている。
「そ、そうでした。そうでしたわ、忘れていたわけじゃないんですよ？ただ・・・」
「あたしは、すっかり忘れてたよ。にしし。」
「しょうがない２人ね！やっぱり、わたしがリーダーじゃないと駄目ね。」
３人が、きゃいきゃい騒いでいるのを静止して、順風耳は再び説明を始める。
「それではここから本題です。ブルーメタルには『レアブルーメタル』と言ってブルーメタルの結晶が存在します。これは３００年前に突如この世に現れました。だれが加工したかは不明で、冥界の鬼達が、この世を混乱させるために落としていったんではないかと言われています。まあ、これはあくまでも伝説ですけどね。その『レアブルーメタル』の名は『ＡＳＨＵＲＡ』といいます。」

ここへきて、初めて弥勒が口を開いた。
「その『ＡＳＨＵＲＡ』をおまえさんらに探してきてほしい訳だ。」
３人が、きょとんとした顔をしている。いまいち、ぴんと来てないようである。夜叉姫が弥勒に聞く。
「じゃあ、その『ＡＳＨＵＲＡ』ってのはどこにあるの？」
弥勒は鼻をほじって、鼻くそを丸め、ぴんと順風耳に向かって投げる。もちろん彼はさっと避ける。
「ばーか。ある場所がわかってりゃおめえらにたのまねえよ。探す

んだよこの世界のどこかにある物を、おめえさんらが。」

3人が一瞬固まった、そして口をそろえて大きな声で叫んだ。

「えーーーーーーーーーー！！！！？」

一章の４　ＡＳＨＵＲＡをさがしに行くんです

３人は、おもいっきり嫌な顔をしながら、ぶーぶーと文句を垂れている。弥勒（みろく）は耳を押さえて、聞こえない振りをしている。順風耳（じゅんぷうじ）は、３人に向かって両の手を広げ、おさえておさえてと彼女らをなだめている。

「なにも闇雲に探せと言ってるわけじゃないんですよ。」

夜叉姫（やしゃひめ）は口を尖（とが）らせて、文句を言っている。

「でもさーどんな物かもわからない物をさー探せって言われても、何年かかるかわかんないよ。あたしたちおばあちゃんになっちゃうじゃん！」

羅刹（らせつ）と般若が、うんうんと頷（うなず）いている。

「ですから、手掛かりが全然無いわけではないんですってば。私達が知ってるのは『ＡＳＨＵＲＡ』の存在だけなんですが、他の大賢者様たちが何か情報を持ってるかもしれません。その大賢者様たちにお会いして情報を集め、あなた達で探し出してもらおう、というわけなのですよ。」

般若（はんにゃ）がちょっと面倒くさそうな顔をして、弥勒にくってかかった。

「だったら、弥勒じじいがさがせばいいじゃん！あんた大賢者なんでしょ？不思議なちからで簡単に見つけられるじゃない。」

弥勒は、ん？わしのこと？といったとぼけた顔で３人に答えた。

「だって、めんどくさ・・・じゃない。これもおめえらの修行のためじゃ、この広い世界を周って見聞を広め、心身ともに素晴らしい女性になってもらおうっていう、わしの親心がわからんのか！それをぶーぶー文句たれやがっておめえらは・・・」

３人が口をそろえて怒鳴る。

「わかるかー！」

「なんだとてめえら！上等だ表でろ！まとめて相手してやる！」

そこへ順風耳が割ってはいる。
「もう、いいかげんにしなさい！なんですか弥勒様、女の子相手にむきになって。あなた達もあなた達ですよ！これは弥勒様があなた達の事を思っての修行なんですよ。感謝こそすれ文句を言うなんてもってのほかです。」
順風耳に怒られて、３人はしゅんとなっている。それを察した順風耳はなだめる様に。
「それに『ＡＳＨＵＲＡ』を手にした者は、３つの願いを叶えてくれるといいます。願いはあなた達が叶えてかまいませんから、『ＡＳＨＵＲＡ』の現物だけを持って帰ってきてください。」
それを聞いた３人は、目をきらきらさせて口々に話す。
「本当ですか？だったら私は、お金だな～１億ギル。いや、１００億ギルもあれば、あれも買ってこれも買って・・・」
「あたしは、胸がぼん！腰がきゅ！お尻がぷりっ！の女の子になりたい！」
「わたしは、とりあえず記憶を取り戻したいわ。」

弥勒は現金なやつらだな、と呆れた顔をしている。そこで、こほんと咳払い。
「よし、おめえらが承諾したところで、明日にでも出発してもらうぜ。そうだな・・・まずは西へ向かってもらうか。そこにわしと同じ大賢者の『観音（かのん）』がいる、そいつに会っていろいろ話を聞くといいぜ。」
３人は、べつに承諾したわけではないんだけどな。と思ったが、口には出さない。
「まあいいですわ、その『観音』様にお会いすればいいんですね？」
羅刹がため息混じりに話す。夜叉姫と般若も、半ばあきらめたように、しぶしぶ納得したようだ。
順風耳は、にこりと笑い３人に話す。

「よかった、それでは行ってくれるのですね。『観音』様がおられるのはここから西へ行った所に、霊峰(れいほう)『須弥山(しゅみせん)』が見えます。そこの山頂におられるので、訪ねてください。事前に話は通しておきますから安心して行って下さい。」

弥勒は、すっと立ち上がり。3人と順風耳に話す。

「じゃあ、長旅になるんで色々準備しねえとな。順風耳よ、こいつらを蔵(くら)まで案内して色々役に立ちそうな物を見繕(みつくろ)ってやんな。」

「はい、かしこまりました。それでは3人ともこっちへきて下さい。」

順風耳が歩き出す。それにつづいて羅刹、夜叉姫、般若と歩き出した。そこで弥勒が般若を呼び止めた。

「おっと、般若。おまえさんには話がある、ちょっとこっちへ付いてきな。」

般若はおもいっきり嫌な顔をしている。

「なによー話って。ま、まさか、誰もいない所でわたしを襲うつもりじゃないでしょうね?」

警戒心を強めた口調で弥勒を、じとーっと見ている。弥勒はすこし、むっとして。

「ばかやろう。誰が襲うか!いいからこっちへ来いってんだ。」

般若はわかったわよと言い、しぶしぶついていった。

般若が弥勒に連れてこられたのは、庭だった。弥勒は小さな石を拾い数歩あるいた所に、ぽんと置く。

「動かしてみな。」

般若は、訳がわからず置いてある小石の所へ歩き、手でひょいと拾った。

「ばーか、手で拾ってどうするよ。手を使わずに拾うんだよ。」

「はぁあああ?そんなこと出来るわけないじゃない!馬鹿も休み休みいいなさいよ!」

と言い、持っていた小石を弥勒に投げつけた。弥勒はそれを、ひょいとかわす。

「いいからやんな、おめえさんにはその力がある。できるまで飯くわさねえからな。」

般若は、ぶつぶつ言いながら仕方なく始める。目を閉じて意識を集中させる。が、小石は、ぴくりともしない。そこで弥勒が話しかける。

「おいおい、ただ意識を集中させれば良いってもんじゃねえぜ。おまえさん『動くわけ無い』って心の何処かで思ってるだろ?それをとっぱらいな。『絶対動く』って念じれば、おまえさんだったら簡単にできるさ。」

彼女はもう一度意識を集中させる。さっきまでは、動け動けと念じていたが、今度は動く動くと念じた。すると暫くして小石がカタカタと震えだした。

「う、動いた!動いたわよ!」

般若は、きゃっきゃっと騒いでいる。それを見て弥勒は微笑んでいる。

「ほう、意外と早かったな。これがおまえさんが持っている力だ。『念動力』という。だんだん力が強くなれば物の重さに関係なく自在に動かせるようになるぜ。」

般若はふと思った、この感じどこかで・・・だがそれがなにか思い出せない。なぜか初めてじゃない気がしている。彼女は弥勒にたずねた。

「ねえ、じいさん。この力って、わたしが記憶を無くす前から持っていたの?」

「ああ、そうだ。」

般若は自分の手を見つめて、悲しそうな顔をしている。

「なんだか、怖い・・・」

弥勒は彼女の頭を、ぽんぽんとたたき、優しく語りかけた。

「心配いらねえよ、そんな悲しそうな顔するなって。どんな力も正

しく使えばいいのさ、おまえさんはこの力を正しく使える。さあ修行の続きだ、まだまだこんなもんで満足してもらっちゃこまるぜ。」
般若は、うんと頷き、小石の方を向いて再び意識を集中させた。

弥勒が住んでいるこの空間は、日が暮れない。そして常に春の日の様な心地よい気候になっている。外界ではもう日が暮れている頃に、蔵から荷物を担いだ夜叉姫と羅刹が出てきた。
「これくらいあれば、当分大丈夫ね。」
羅刹は背負った荷物を、ゆさゆさとしている。夜叉姫は羅刹の倍はあろうかという荷物を軽々と背負って、両の手に着いている小手を、にこにこと見ている。
「そうだね、武器も貰ったし。あたしはこの小手が気に入ったな、カッコイイよこれ。」
「私は銃にしたわ。体術は夜叉姫に負けないけど、実は射撃の方が自身あるのよね。」
「気に入ってくれてなによりです。夜叉姫ちゃんの小手は、昔、弥勒様が使っていたものなんですよ。羅刹さんのは私が製作した銃です、ちょっと癖がありますがあなたなら使いこなせるでしょう。」
3人が、わいわいと話しながら庭先まで来た時。夜叉姫が、ぎょっとした顔で羅刹の肩をばしばしと叩いている。
「羅刹、羅刹！ちょっとちょっと。あれみてあれみて！」
「痛い、痛いってば～なによ？」
羅刹が夜叉姫の指差した方を見た。羅刹は大きく見開いて、口をあんぐりと空けている。
「な、なにあれ・・・あの子、いったいなにしてるの・・・？」

庭の真ん中に般若が立っている、その傍らに弥勒が胡坐をかいて座っている。
般若は右腕を上げ、人差し指を立てている。その指先の上には、こ

ぶし大の石が浮いている。
「じいさん、いつでもいいわよ。」
彼女が見つめる先には、大木がある。その幹には9つの穴が開いている。弥勒が指を、ぱちんと鳴らすとそれを待っていた様に、般若が大木に向かって腕を振り下ろす。指先に浮いていた石が大木めがけて放たれた。轟音をあげ、石は大木に命中した。
「やったあ！これで10連続命中！どんなもんよ、じいさん？」
「ほえーたいしたもんだな～短時間でここまで成長するとはな～」
弥勒は感嘆の声を上げ、般若をみつめている。
「まあ、わたしにかかればこれ位は朝メシ前よ。自分の才能が怖いわ・・・ほほほほほほ！」
「調子に乗るんじゃねえ、このばか！まだ第一段階が終わったところだ。」
弥勒が、こつんと般若の頭を叩いた。
「いったーい。なにすんのよ～いいじゃない別に。いーだ！」
　するとそこへ、夜叉姫、羅刹、順風耳が駆け寄ってきた。夜叉姫が般若のまわりを、ぐるぐる回って興味深そうにみている。羅刹も驚いた顔で彼女を上から下へ、じろじろと見ている。般若は照れくさそうに。
「な、なによ～2人とも。そんなに見ないでよ！恥ずかしいじゃない。」
「へー、あんた本当にサイキッカーだったんだねー。」
夜叉姫が頭のうえに大きな『？』をつけて、順風耳に尋ねた。
「ね、ね。先生、さいきっかあって何？」
「サイキッカーと言うのはですね、人が稀に持っている特殊能力のことです。物を手を触れずに動かしたり、未来を予言したり。等の力を持った者を称してサイキッカーと呼ぶんです。般若ちゃんは手を触れずに物を動かせる『念動力』者のようですね。」
夜叉姫が、ほえーと感嘆の声をあげて感動している。
「すごいねー般若は。かっこいいねーすごいねー。」

弥勒がみんなをみて、手をぱんと叩いて言った。
「おめえら準備が整ったようだな。それじゃ今晩はゆっくりして、明日に備えな。それじゃ飯にすっか～」
夜叉姫と般若が両手を上げて、喜んでいる。
「やったーもう、おなかぺこぺこだよ～」
「わたしもー念動力って意外と力使うのよね。ていうかここ最近なにも食べてない気がする。」
順風耳が、にこりと微笑んで言った。
「それじゃ今日は般若ちゃんの歓迎もこめて、ご馳走にしましょう。羅刹さん、お手伝い願えますか？」
「はい、もちろんです。」
羅刹は、にっこり笑って答える。５人は小屋へ向かって歩き出した。

宴が始まった。食卓の上にはご馳走が並んでいる、夜叉姫と般若が我先にと手を伸ばした。弥勒は順風耳に行儀が悪いと叱られ、夜叉姫は、羅刹の分のおかずを食べてしまって激怒されたり、般若は水とお酒を間違い弥勒に絡んでいる。
わいわいと騒ぎながら、楽しい宴が終わっていく。そしてみんなが眠りについた。

そして一夜すぎ、出発の日。
羅刹、夜叉姫、般若が荷物を持って小屋を後にする。夜叉姫は見送りにきている弥勒と順風耳に手を振っている。
「それじゃ、じっちゃん、先生いってくるね！」
羅刹は、ぺこりとお辞儀をして、旅立ちの挨拶を丁寧にしている。
「弥勒様、順風耳先生、お世話になりました。必ず『ＡＳＨＵＲＡ』を持って帰ります。」
般若はそのまま行こうとしたが、２人が挨拶しているので、しょうがないと言った感じで振り返って挨拶をする。

「順風耳様、いってきますぅ～、ついでに弥勒のじいさん、わたしが『ＡＳＨＵＲＡ』を見つけ出してやるから、その時は崇め奉りなさいよ～」

弥勒は苦笑いをしながら見送っている。順風耳は、にこにこと微笑みながら手を振っている。

「おー行ってこい。大丈夫だと思うが気をつけんだぜ～それと般若よ、念動力の修行さぼるんじゃねえぞ～」

「いってらっしゃい。まずは西に向かうんですよー『観音』様に必ずあうようにねー」

３人は、はーいと言って歩き出す。暫くあるきだすと、夜叉姫が止まって大きな声で呼びかける。

「おーい、宮毘羅くーん。おねがーい。」

すると、とーんとんと音がして夜叉姫の目前に大きな穴が開き、そこからは外界が見えている。３人は穴をくぐり、外界へと出た。

そこには宮毘羅が立っていて、優しい目で３人を見ている。

「もう、お帰りですか？もう少しゆっくりしていけばよろしいのに。」

宮毘羅にそう言われると、夜叉姫が、へへっと笑って答える。

「そうしたいんだけどさ、じっちゃんに頼まれ事されちゃって。これから西に行くんだ。」

「ほー西ですか・・・道中大変でしょうがお気をつけて。」

彼は、羅刹の後ろに恥ずかしそうに隠れている般若を見つけた。

「おお、この方が般若様ですな。順風耳様から伺っております、我は宮毘羅と申します。以後お見知りおきを。」

宮毘羅は般若に深々と頭を下げた。般若は羅刹の後ろに隠れて、もじもじしている。羅刹に、ちゃんと挨拶なさいと促されて羅刹の前に出た。

「よ、よろしく・・・」

宮毘羅はにこりと笑って、腰にある巾着に手をいれて、ごそごそと何かを探し出して般若に渡した。

「般若様、これをお納めくだされ。」
般若が手渡されたのは、４本のクナイの様なものだった。ごつごつとしていてお世辞にも綺麗と呼べるものではなかった。
「それは我が『メイカイオオトラ』を退治したときの骨で作ったものです。形は不恰好ですが、切れ味と丈夫さは保障しますぞ。ぜひ、護身用としてお納めくだされ。」
般若は、嬉しかった。人に何かをもらった事なんていままで無かった気がする。記憶を無くしているが、なんとなくそう思う。
そして、満面の笑みで宮毘羅に答えた。
「あ、ありがとう。すごく嬉しい！大事にするね、宮毘羅のおじさん。」
般若と宮毘羅は笑いあっている。そして宮毘羅は羅刹にたずねた。
「西へ行って何をなさるのです？」
「『ＡＳＨＵＲＡ』をさがしに行くんです。弥勒様の命令で。」
宮毘羅はちょっと難しい顔をして、ぶつぶつと呟いた。
「『ＡＳＨＵＲＡ』？『ＡＳＨＵＲＡ』ですと？また、弥勒様も難儀なことを・・・」
３人は、ん？と思い顔を見合わせている。でもいそがなくちゃと思い、枯れた大木の前に停めてある車に飛び乗った。
運転席には夜叉姫、助手席に羅刹。そして後部席には般若が乗り込み、車が発車した。
宮毘羅が大きな手を振って、見送っている。
「いってらっしゃいませー、ご無事でお帰りになるようお祈りしておりますぞー！」
羅刹と般若が、窓から顔を出して答える。
「はーい！いってきまーす！」

出会うべくして出会った３人を乗せた車が、西へ向かう。まずは霊峰『須弥山』に住むという『観音』に会うために。

箸休め　伐折羅の一番長い日

俺は伐折羅、自分で言うのもなんだが結構いい男だとおもう。だが最近の俺はついていない、まったく嫌になる。

俺は、いや俺達はいま砂漠を走っている。運転席には部下の摩虎羅（まこら）、そして後部席にはあのザック＝レトリック。なぜ俺がこの２人と一緒なのか、話すと長くなるんだが聞いてくれ。

それは２日前、ザックにあの餓鬼どもの始末を依頼した夜、俺は店をでて自分の豪邸へと帰った。立て付けの悪い扉を開け、部屋に入る。布団に入り寝ようとしたが中々寝付けない、ヤツは本当に大丈夫なんだろうか？もしかしてザックの名を騙（かた）った偽者で、メシ代をたかられただけなんじゃないか？でも、本物だったら噂通り始末してくれるんだろう。だったら残りの金を用意しなくちゃならない、いくら位掛かるんだろ？などと考えてるうちにいつの間にか眠っていた。

朝が来た、なんだか目覚めが悪い。体調が悪くても仕事へは行かなければ、現場監督だからな。気分が悪いので朝メシは食わない。重い気分のまま車に乗り込む、キーを差込みエンジンをかける。エンジンをかける、エンジンを・・・かからない！なんでだ？よりによってこんな日に！勘弁してくれ。しかたがない、俺は車を諦めて歩いて行く事にした。完全に遅刻だ、また作業員に文句をいわれるんだろうな。憂鬱（ゆううつ）な気分のまま現場まで足取り重く歩いて行った。

歩くこと１時間、やっと現場に着いた。なんてこった４０分の遅刻だ。事務所に入り「おはよう」と挨拶する、が誰も返事してくれ

無い。気分の悪いまま自分の机に向かう、その時俺に近づいてくるヤツがいた。摩虎羅だ。

こいつは、おれの部下で副監督。へらへらと笑って話しかけてくる、気分のいい日でも鬱陶しいのに今日は特にイライラする。

「おはようございます、監督。お早いご出勤ですな。まあ監督がいなくても、僕が作業計画を作っていますからお休みになられてもよかったんですけどね。」

前々から思っていたんだが、今日で確信した。こいつは、俺を馬鹿にしている。だがこんな事で怒るほど俺は若くはない・・・はず。

「車が故障してな、歩いてここまできた。」

ちょっと、ムッとしながら答えてしまった。ふっ・・・俺もまだ若い。すると摩虎羅は事務所の窓を開けて、外をきょろきょろ見ている。なんだか落ち着きの無い様子で、そわそわしている。イライラするので聞いたみた。

「なんだよ、さっきから鬱陶(うっとお)しい。」

「いやね、そろそろあの子たちが来るだろうと思ってね。」

さすが、副監督。いつも責任はすべて俺に擦り付けているくせに、さすがに採掘場を荒らされるのは心配とみえる。そこで俺は言ってやった。

「今日は、というかヤツらはもう来ないかもしれないぜ。」

「え、どういうことですか?」

俺は、昨日酒場であった出来事を摩虎羅に話した。するとヤツの顔が真っ赤になって、怒り出しやがった。訳がわからん。

「な、なんてことを!そんなことしたら、そんなことしたら。夜叉姫(やしゃひめ)ちゃんが、怪我しちゃうじゃないですか!」

へ?こいつ今何て言ったの。確認の為にもう一度聞いてみる。

「あ、あのさ。俺、今日体調が悪くて耳がどうかしてるかもしれないんだ。もう一度いってくれる?」

「だから、そんな殺し屋に狙われたら。夜叉姫ちゃんが怪我しちゃうって言ってるんですよ!」

夜叉姫ちゃんが怪我をしちゃう?殺し屋に狙われてるんだ、怪我どころで済むはずがないだろ。すると摩虎羅は財布を取り出し、1枚の写真を俺に見せた。

「見てくださいよ、これ。」

俺はそれを見て愕然(がくぜん)とした。そこには夜叉姫のガキと、摩虎羅が仲良くならんで写っている。なにこれ?

「へへーん、いいでしょ。2週間前に彼女たちがここに来た時、撮ったんです。駄目もとで聞いてみたら、1つ返事で了解してくれましてね。いやーいい子達だ、そしたらもうすっかり撮影会になっちゃって。最初は、怖がっていた作業員たちもすっかり打ち解けちゃいましてね。いまじゃ、後援会まであるんですよ。」

えーと・・・落ち着いて整理してみよう。撮影会があった、作業員たちが打ち解ける。そんで後援会ができたのね、なるほど、なるほど。わかった、こいつは馬鹿だ。イライラがムカムカへと昇格した、怒鳴った、怒鳴ってやった。

「あほかー!おまえわかってんの?採掘場荒らしの張本人たちだよ?なに仲良くなってんの?撮影会だあ?後援会だあ?なに考えてんだよまったく!」

だが摩虎羅は、きょとんとしている。俺の言ってる事が、わからないってないみたいな顔している。

「なに考えてるって、そりゃあこの子たちが可愛いからじゃないですか。なにを隠そう僕は『夜叉姫後援会』の会長なんですよ。『羅刹(らせつ)様後援会』よりは人数が少ないですが、そのうち人数を増やして見せますよ。」

鼻息荒く、得意満面な顔をしてやがる。なにこいつ、気持ち悪っ。もういい・・・怒る気もうせた、俺は肩を落として落胆(らくたん)する。

「もう、俺今日は帰る・・・気分が悪い。今日の指示はおまえに任せた・・・」

そう言って俺は、事務所を後にし家路にとついた。

今日はザックとの約束の日だ、仕事を終えた俺はヤツと会った酒場へ向かう。一応、金は用意してきた。５０万ギル、これは俺が出せる精一杯の金だった。それはまあいいとして、なぜか摩虎羅が着いてきている。

「なんで、おまえがついてくる？」

「なんでって、僕は『夜叉姫後援会』会長ですよ？万が一夜叉姫ちゃんに何かあったら、その殺し屋をとっちめてやろうと思ってついてきたんですよ。」

もういい、おまえは喋るな。そうこうしてるうちに、俺と馬鹿は酒場に着いた。カウンターに腰掛け、ヤツが来るのを待つことにした。だが、一向に現れる気配が無い。どれくらい時間がたっただろうか、すると入り口の扉が勢いよく開いて１人の男が入ってきた。ザックだ。ザックは俺を見つけると、ツカツカとやってきて椅子に腰をおりした。するとヤツはカウンターにうつ伏せになり倒れこんだ。どうしたってんだ？

俺は、恐る恐る聞いてみた。

「あ、あの～ザックさん？どうしました？」

ザックは、顔をあげて疲れた目をしてこう答えた。

「す、すまねえ・・・とりあえず酒をくれ。」

俺は女主人からグラスをもらい、そこに酒を注いだ。ザックは一気に酒を飲み干し、一息ついて話し出した。

「悪い、失敗した。」

はあ？なに言ってのこいつ。俺は、ちょっとムッとしてたずねた。

「失敗？失敗ってどういうことだよ。」

「まぁ待て、聞いてくれ。俺はあいつらをいいところまで追い詰めたんだ。そして止(とど)めを刺そうとした所、やつら卑怯にも俺の娘を盾にしやがった。いくら俺でも、愛するわが子を人質にとれれちゃ手が出ねえ。そのままやつらは俺の娘をさらって、逃げ出しやがった。すまねえな・・・」

なんてヤツらだ、悪魔の様な餓鬼とは思っていたが、あんな小さな子を人質にとるなんて。とんでもねえ餓鬼どもだ。

「俺も一流の殺し屋、ザック＝レトリックと呼ばれる男だ。その誇りがある、一度うけた依頼は必ず成功させてみせる。そこでおまえさんに頼みがある。」

ん?と俺は不思議な顔をした。なんだ頼みって?なぜだか胸騒ぎがする、なんだろう?

「な、なんだよ。頼みって。」

「あいつらを追いかけたい。娘を取り返すのもあるが、もちろんヤツらの始末が最優先だ。だがどこへ行ったかわからねえ、おまえさん俺と一緒について来てくれないか?」

な、なに言ってるのこの人?訳わからん。

「む、無理だよ。そりゃああんたの娘さんは気の毒だとおもうが、一緒に探しに行くって無理にきまって・・・」

言葉が終わらないうちに、ヤツは俺に銃を向けた。

「なんだって?俺の頼みが聞けないってのかい?」

あんた、それが人に物を頼む態度ですか?だが俺も負けちゃいねえ、すかさず返答した。

「い、いや・・・む、無理だって。そんなに仕事に穴を空けちゃ、会社を解雇(クビ)になっちまうよ・・・」

ヤツは撃鉄をおろし、俺の額に銃口を当てた。こわい、こわい。

「会社を解雇(クビ)になるのと、俺に首を飛ばされるのと、どっちがいい?そうだな、とりあえず車と金を用意しろ。」

これか!これだったのか、嫌な胸騒ぎの正体は。あわあわとしていると、摩虎羅がこっそり逃げ出そうとしている。それを見逃さない俺は、ヤツの腕を掴み放さない。

「ちょ、ちょっとなにしてんですか!僕は関係ないでしょう。」

「うるさい、馬鹿野郎。こうなったらお前も道ずれだ!おまえたしか大きな車持ってたよな?用意しろ。」

するとザックはにこりと笑って、銃を摩虎羅に向けた。もういいか

ら撃っちゃって下さい。
「ほう、おまえさんは車もってるのかい。いまから10分やるからここへ持ってこい！逃げやがったら、おまえの頭つぶれたトマトみたいにしてやるぜ・・・」
「は、はい！今すぐ持ってきます！」
摩虎羅は、ものすごい勢いで店をでた。ザックは再び銃口を俺にむける。こわいから止めてください。
「すると後は金だな・・・おまえいくらもってる？」
俺は、懐(ふところ)に手を入れてザックに渡すはずだった金を渡した。
「こ、ここに50万ギルある・・・」
ザックは乱暴に金を奪い取って、自分の懐に入れた。
「50万ギルか、当分なんとかなりそうだな。」
「で、でも探しに行くっていったい何処へ・・・」
「そうだな・・・ここから一番近い町はどこだ？」
一番近い町・・・近い町・・・だったら西のほうかな・・・？
「ここから、西へ向かったところに須弥山(しゅみせん)って山があって、そこの麓(ふもと)に町がある・・・そこが一番近いかな。近いって言っても500kmはあるけど・・・」
そこへ摩虎羅が帰ったきた。こいつの性格上、絶対逃げ出すと思ったんだが。
「車をもってきました！」
「お、意外と速かったな。さあ、今から西の町へ向かうぞ、立て。」
ザックは俺の背中に銃を向け直して、歩けと促(うなが)した。俺達は店を出る。
「ほーいい車じゃねえか。おい、おまえが運転しろ！」
摩虎羅は、とぼけた顔をして答える。
「え？僕ですか？」
「おまえの車だろ？おまえが運転するんだよ。早くしろ！」
摩虎羅は、はいっといい、飛び込むように運転席に飛び乗った。俺は助手席に乗せられ、ザックは後部席に乗った。

「あのーどこへ行けば・・・」
「西だ、西の町へ向かえ。」
エンジンをかけて車を発車させる、砂漠を砂煙を上げて走り出した。

とういう訳で、俺は、いや俺達は今砂漠を走っている。運転席に摩虎羅、後部席にザック＝レトリックを乗せて。はあああ・・・これからどうなるんだろう・・・

二章の１　般若ならできるって！

照りつける太陽に照らされながら、砂漠を走りぬける１台の車。
車内には３人の少女達、夜叉姫、羅刹、般若。
太陽が一番高く上がっている時間帯で、車内の温度は窓を全開にしていても４０度以上はある。後部席にいる般若なんかぐったりしている始末。
「あーつーいー。ねえ、なんとかなんないの？こう暑くちゃかなわないわ。蒸し饅頭になった気分よ。」
前の座席にいる２人は、平気な顔をしている。運転席の夜叉姫は、ハンドルを握って涼しい顔。羅刹も助手席に座って、平気な顔をしている。
「そう？今日なんかまだ涼しいくらいだよ。ねえ、羅刹？」
「そうね、いつもならもっと暑いんだけどね。夏も終わりに近づいてるのかな？。」
般若は、呆れた顔をして切り替えした。
「まったく・・・しんじらんない！あんた達は田舎暮らしの山猿でしょうけど、わたしはお嬢様なんですからね。こんなの耐えられるわけないじゃない！」
記憶を無くしてるのに、お嬢様って。２人は吹き出しそうになりながら、般若の話を聞いていた。
暫く走っていると、羅刹はある物を見つけた。
「夜叉姫、止まって！」
夜叉姫は車を停車させ、訳がわからないって顔をしている。
「なんなの？なにがあったの。」
羅刹が車から飛び出し、見つけたものは看板だった。そこにはこう

書いてあった。
「須弥山(しゅみせん)まであと４００ｋｍ。山賊注意。」
彼女の後から、車を降りた2人も看板を見ている。般若が不思議そうな顔をして、羅刹にたずねた。
「ねえ、さんぞくってなに？」
「山賊ってのはね、旅人からお金や荷物を奪って生活してる人たちの事よ。そうか～ここ山賊がでるのか。」
羅刹は、腕組をしながら考えている。そして何か閃(ひらめ)いた様に、にこにこしながら話し出した。
「よし、今日はここで野宿しましょう。」
2人は口を揃えて、えーと言っている。
「羅刹、なに言ってるの？あと少しで砂漠を越えるんだよ？なにもこんなとこで野宿しなくっても。」
「そうよそうよ！夜叉姫の言うとおりだわ。大体野宿なんて、このわたしが出来るはずないでしょ！」
羅刹は、ぶーぶー文句言っている夜叉姫に目で合図をした。それを察した夜叉姫は、文句を言うのを止め、にこにこしだした。
「そうだね。弥勒のじっちゃんから貰ったお金も大事に使わないといけないし、野宿ってのもありかもね。」
般若は目を大きく見開いて、夜叉姫にくってかかる。
「な、なによ！あんたまで。裏切り者ー！」
般若は地面に寝転がって、手足をジタバタさせて駄々をこねている。
羅刹はそれを見ても意に介さず、淡々と話す。
「はい、じゃあ野営の準備しましょうか。」
般若は、諦めて立ち上がり半ばベソをかきながら、しぶしぶ野営の準備を手伝った。

日が傾きかけてきた頃に、野営の準備は終了した。ぱんぱんと手を払った夜叉姫が羅刹に話しかける。

「寝床はこれでよしと、んでこれからどうする？」
羅刹はカバンの中から、小刀を取り出し夜叉姫に渡した。
「そうね、食料でも探しに行きましょうか。般若、悪いんだけど留守番お願いね。私達は何か食べれそうなもの見つけてくるから。」
疲れて座っている般若が、すくっと立ち上がり驚いた顔をしている。
「えー冗談じゃないわよ！わたし1人こんなところで留守番ですって？わたしも行くわ。」
夜叉姫が小刀を、ぽいぽいと投げて遊んでいる。
「でも、だれかいないとさ～車とか荷物とか盗(と)られちゃうよ？」
「だったらあんたが残りなさいよ！」
般若が夜叉姫に、やいやい言ってると羅刹がこほんと咳払い。
「もー文句ばっかり言わないの！今回はあなたが留守番。これからこんな事が増えるんだから、慣れてもらわないと。それにあなた狩なんかできなでしょ？」
般若はびたっと止まり、目に涙をためながら上目遣いで口を尖(とが)らせぶつぶつ言い出した。
「そりゃあ・・・狩なんかできないけどさ・・・だからって・・・」
夜叉姫が般若の頭を、なでて微笑みながら優しく語りかけた。
「心配しなくても、すぐ帰ってくるって。ここら辺は『サバクオオトカゲ』の生息地だから、いっぱい捕ってくるね。」
言い終わると2人は、般若を残して狩に出かけていった。般若は暫く、きょとんとしていたが我に返り。
「ちょ、ちょっと！わたしトカゲなんか食べないからね？ちょっと聞いてる？おーい、話ききなさいよ！」
文句を言ったが2人は届かない。ぽつんととりのこされた般若は、しょうがないと諦(あきら)め火を熾(おこ)した。

焚き火に薪(まき)をくべながら、般若はぶつぶつと独り言をいっている。
「遅いなあ・・・なにが早く帰ってくるよ。か弱い少女を一人ぼっちにしてさ・・・」

するとなにやら、足音が聞こえてきた。帰ってきた?と思ったが足音は2人じゃない、もっといる。
暗闇の中から、野性味溢れる男達が数人現れた。そしていやらしい笑みを浮かべ、般若を見下ろして話し出した。
「くひひひひ・・・お譲ちゃん、どうしたの?こんなところで。」
般若は身構えて、警戒心を強める。
「な、なんなのよ・・・あんたたち・・・」
「俺達は、ここら辺をねぐらにしている山賊の『夜摩天党(やまてん)』ってもんだ。お譲ちゃん死にたくなかったら、金と荷物を置いていきな。」
やばい、どうしよう、殺されるかもしれない。でもここで逃げ出したら、あの2人に何を言われるかわかったもんじゃない。
般若は震えている。だが精一杯強がって山賊達にくってかかった。
「ふ、ふんだ!あんたたちに何もあげないわよ!」

その様子を岩陰に隠れて見ている2つの影、夜叉姫と羅刹。2人はとっくに狩を終え、ここで般若の様子を伺っていたのだ。
「お、来た来た。1、2、3・・・5人だよ羅刹、ちょっと少ないね。」
羅刹は、うんうんと頷(うなず)きながら様子を見ている。
「まあ、最初はこんなもんでしょ。」
夜叉姫は腕を組み目を閉じて、思い出している。
「思い出すなあ〜あたしもこれ、羅刹と先生にやられたっけ。」
「私も、弥勒(みろく)様と順風耳(じゅんぷうじ)先生にやられたわよ。これも修行の一環よ、般若には頑張ってもらわないとね。」

般若は頑張っていた。逃げ出したい、でも逃げたくない。頭の中がぐるぐるしている。その瞬間、般若の鼻先に山賊の剣が向けられた。
「いいから、金を出せって言ってんだ!殺しちまうぞ、このガキ。」
もうだめだ、殺される。泣きべそをかいている般若は、大きな声で

叫んだ。
「羅刹ー夜叉姫～！たすけて～！もう生意気言わないから～お願い～！」
その声を聞いた2人は、岩陰からひょこっと顔を出して、般若に手を振っている。
「はーい。呼んだ？」
般若はほっとしたが、それ以上に怒りがこみ上げてきた。
「ちょっと！いるんなら何とかしてよ！」
羅刹は首を横に振り、駄目といっている。
「はい、ここで修行の開始です。あなたの力を使って、その山賊のおじさん達を追っ払ってくださーい。」
「な、な、な。何言ってるのよ～気はたしかなの～？」
すると夜叉姫が大きな声で、般若に伝える。
「大丈夫だよ！般若なら出来るって。念動力で、やっつけちゃいな！」
そうか、念動力があったんだ。般若は落ち着きを取り戻し、呼吸を整え静かに目を閉じた。そして一気に目を開けると、焚き火の薪が数本浮き、般若の周りを旋回しだした。
「な、なんだ・・・このガキ・・・」
山賊達は戸惑っている、いままで見たことも無い光景に。すると般若は指を立て、自分の周りを回っている火が付いた薪を山賊めがけてとばした。
「あちちちち！なんだ？一体どうなってんだ？」
火の付いた薪が、山賊達に降りかかって来たのだからたまらない。彼らは逃げ惑うばかり、だが1人の勇敢な山賊が火の粉をかいくぐり般若めがけて剣を振り下ろした。だがそこには彼女の姿がいない。
「ばーか。どこ狙ってんのよ！」
山賊の頭の上から声がする、見上げると般若が宙（ちゅう）に浮いていた。彼女は僅（わず）かな間に閃いた、石や木を動かせるんなら自分も動かせるんじゃないだろうか？試してみると以外にも簡単にできた。まだ安定

はしていないが即興にしては上出来だ。
般若は山賊達を見下ろし、指を差して言い放った。
「さあ、こうなったらあんた達は手出しできないわね。さっさとここから立ち去りなさい！」
「や、野郎ども、退却だ！退却～」
山賊たちは、蜘蛛の子を散らすように逃げていった。それを見た般若は安堵のため息を吐き、すーと地上に降りた。安心したのか彼女は、その場にぺたんと座り込んでしまった。
岩陰から様子を見ていた2人が、拍手をして般若のもとへ駆け寄ってきた。
「すごーい！やったね般若。」
「うんうん、すごいわ。まさか空まで飛んじゃうなんて、これで修行の2段階目は終了ね。」
般若は2人を、睨みつけた。そして目からじわじわと涙を溢れさせ、大きな声で泣きじゃくった。
「うえーん！もう、死んじゃうと思ったんだからね。修行するならするって言ってよ～ばかばかばか！」
羅刹はそれを見て、般若を優しく抱きしめた。
「ごめんね、般若。これも試練なんだ、わたしも夜叉姫もこれを乗り越えて仲間になったんだ。これであなたも私達の仲間よ、私達3人は家族なんだよ。」
「仲間・・・家族・・・」
般若は思った、なんて暖かいんだろう。初めて聞く言葉なのに心が、ぽかぽかする。羅刹の母性に包まれて、彼女は泣くのを止めた。
「ところで、夜叉姫は？」
般若がたずねると、羅刹は周りを見渡した、さっきまでここに居たのに。
「変ね、どこ行ったのかしら？」
逃げていた山賊たちが足を止め、息も落ちつからないまま呟いた。

「な、なんだい・・・まったく・・・夢でもみているようだったぜ・・・」

そこへ1つの影が現れた、夜叉姫だ。彼女はにっこり笑い、山賊達に手を振っている。

「はあ～い、おじさん達。ひさしぶりだね！もう6年になるかな、あたしの事おぼえてる？」

山賊の頭領らしき男が夜叉姫を指差し、わなわなと震えている。

「お、お前は・・・あの時のガキ・・・」

夜叉姫は、にっこり笑って答える。

「お！覚えてくれてたんだ～嬉しいなあ。どこかで見たことがある顔だと思ってたんだよね、ここでもおじさん達山賊してたんだ。」

それは夜叉姫が、9歳。羅刹が般若と同じ12歳の頃、今回と同じ夜叉姫が修行をしていた時に現れた山賊達だった。結果はもちろん、覚醒した夜叉姫にこてんぱんにやられ、命からがら逃げ出した。

その時の恐怖がまた蘇った。

「再会の挨拶はここまでにしておいて・・・よくもあたしの妹を泣かせたわね。またボコボコにされたい？それとも・・・」

山賊達は青ざめている、今日は厄日だと言わんばかりに。

「ま、まってくれ！あんたの妹だって分かってりゃあんなことしてないって！わ、わかったから金目の物は置いていくから勘弁してくれ。」

彼らは持っていた剣や、拳銃。それと、ありったけの金を置いて一目散に逃げ出した。夜叉姫はそれらを拾い集め、羅刹たちの居るところへ帰っていった。

暫くすると夜叉姫が帰ってきた、両手に荷物をいっぱい抱えて。

「ただいまー。」

「ちょっとどこ行ってたのよ、ていうか何その荷物？」

羅刹は、夜叉姫が抱えている荷物を見てぎょっとした。

「ああ、これね。向こうに落ちてたんだ、拾ってきたの。」

「ふーん、落ちてたね・・・」
羅刹は夜叉姫をみて、この子またやったわね。と、言いそうになったが止めておいた。これだけの物でも、換金すれば幾らかになりそうだから。
するとそこへ、般若が夜叉姫の所に駆け寄って、恥ずかしそうにたずねた。
「ねえ～夜叉姫。わたしと羅刹と夜叉姫は家族だよね？」
夜叉姫は屈(かか)んで、般若と目線を合わせてにっこり微笑んで答えた。
「当ったり前じゃない！あたしら3人は家族だよ。羅刹が長女で、あたしが次女。んで、般若が三女の末っ子さんだよ。」
般若はそれを聞いて少し考えた。そして夜叉姫に言う。
「夜叉姫が、わたしのお姉さん？それはどうかしら・・・」
夜叉姫が、不思議そうな顔をして返答する。
「え、なんで？あたしの方が年上だから、お姉さんじゃないの？」
「そりゃあ年は上だけど、精神年齢は私の方が上よ？わたしの方がお姉さんじゃない！」
夜叉姫は少し、むっとして立ち上がった。そして般若を指差してこう言った。
「なによ！あたしの方がおねえさんなんです～、あんたなんか泣き虫でチビっこいくせに～」
般若もまた、むっとして手足をジタバタさせながら怒っている。
「いったわね～気にしてる事を！なにさ、あんたなんか胸がチビっこいじゃない！」
「あー胸の事いったね！ムキー腹立つ、ムカつくー！」
２人が、なにさ、なによと言い合っているところへ羅刹が止めに入る。
「はいはい、もう喧嘩しないの。」
２人は口を揃えて、羅刹に言い放った。
「うるさい！だまってて。」
すると羅刹のこめかみが、ピクっとなり、その瞬間暗黒のオーラが

この辺り一帯を包んだ。
「ねえ・・・今、なんて言ったの？・・・よく聞こえなかったんだけど・・・もう1度いってくれる・・・」
夜叉姫は青ざめた、もう何度も経験している。般若は初めてなのだが、本能が危険と感じ取った。そして2人は口を揃えて言う。
「いえ！なんでもありません。お姉さま！」
この辺りの動物達は危険を感じたのだろうか、次々とこの場から離れていく。
「あんたたち・・・まだ喧嘩するつもりなの・・・？」
「いえ、もうしません！わたしたちはとっても仲良しです！」
2人は手を取り合って、抱き合っている。その瞬間、暗黒のオーラがなくなり穏やかな空気が満ちてきた。
「もう～だめよ喧嘩なんかしちゃ。あなた達が本気で喧嘩したら、私絶対止められないんだから。」
いえ、大丈夫です。あなたが最強ですから、と2人は思ったが口には出さない。
「もうすぐ食事が出来るわよ、みんな手伝って。」
2人は、はいと元気よく返事をして羅刹のそばに駆け寄った。

こうして旅の1日目が過ぎていった。夜叉姫と般若は食事をしながら思った、あのオーラに立ち向かうことが修行の最終過程だったらどうしようと。

二章の2　ぎっちゃんて呼んでいい？

3人を乗せた車が、砂漠を抜けた。そこは、見渡す限り草原が広がっている。地平線の向こうに、山の影が小さく見える。
小さな山の影を指差したの夜叉姫（やしゃひめ）は、羅刹（らせつ）にたずねた。
「羅刹、あの向こうに見える小さな山が須弥山（しゅみせん）なのかな？」
羅刹は地図を広げて、ふむふむと頷いている。
「えーと、砂漠を抜けたところだから・・・私達がいるのがここでしょ・・・うん、そうねあれを目指して走って行こう。」
「おーやっぱり！それじゃとばすね！」
車は速度を増して、草原を走っていく。目的地に近づいてきた事が、否応なしにも3人の気分を上昇させる。

須弥山がこぶし位の大きさに見えた頃、後部席の般若（はんにゃ）が、2人に向かって話しかける。
「ねえねえ、2人とも。気が付いてる？さっきからずっとつけられてるの。」
夜叉姫と羅刹が、真剣な顔をして頷いている。彼女らも、さっきから気が付いていたのだ。
羅刹が、チラリと後方をみる。彼女が見た方には1台のバイク。それが、彼女らに付かず離れず付いてきている。
夜叉姫は、羅刹にたずねる。
「あれって、完全にあたし達をつけてるよね。」
「そうね私達を狙った殺し屋か、賞金稼ぎってところかしら。」
般若がギョッとして、2人に話しかける。
「ちょっと！殺し屋とか賞金稼ぎってどういうこと？ていうか、狙

われてるの？わたし達。」
２人がきょとんとしている、羅刹が後ろを振向いて般若に返した。
「あれ？言ってなかったっけ。」
「聞いてないわよ！まったく、あんた達と行動してると命が幾つあってもたりないわ。」
般若が頬を膨らませ、ぷんぷんと怒っている。夜叉姫は、もう一度羅刹にたずねた。
「で、どうする？あたしがぶっ飛ばしてこようか。」
羅刹が首を横に振る。
「いいわ、今回は私がでる。夜叉姫、止めてちょうだい。」
夜叉姫は車を止めた。羅刹は静かに車から降り、つけてきているバイクを待った。暫くするとバイクが近づいてきて、羅刹の前で止まった。草原に緊張感が走る、つけていた者はバイクを降りて羅刹に近づいてくる。
「ちょっと！さっきから鬱陶(うっとお)しいのよ。私達を狙ってきたんでしょ？さっさとかかって来なさい。」
黒いヘルメットを被り、全身は黒いレザースーツもまとっている。スタイルから見て、女性のようだ。彼女は羅刹の前に止まってぺこりと礼をした。
羅刹はそれを見て、ちょっと調子を狂わされた。
「な、なに？礼儀正しい殺し屋ね。それによく見ると女の様ね、だからって手加減しないわよ。」
女性は、首をぶるぶる振って否定している。そしてなにか言ってるようだ。
「モゴ、モゴモゴゴ。モゴゴ！」
羅刹はぎょとんとして、女性を見ている。そして呆れた顔をして女性に言った。
「ちょっと、何言ってるかわかんないわよ。ていうかメット取りなさい、付けたまま喋ったってわからないでしょ！」
女性は、はっとして慌ててヘルメットを取った。ヘルメットを取る

と、端正な顔立ちをした美少女。彼女は、改めて礼をした。
「失礼いたしました。私は『観音（かのん）』様の侍女で、伎芸天（ぎげいてん）と申します。以後お見知りおきを。あなた様が羅刹様でしょうか？」
羅刹は丁寧な挨拶をされ、とまどっている。そして彼女も礼儀正しく挨拶をした。
「は、はい。私が羅刹です。丁寧な挨拶恐れ入ります、こちらこそよろしくお願いします。」
ぺこぺこと、お辞儀合戦が始まった。そして伎芸天は話し出した。
「実はですね・・・」
伎芸天が話し始めたとたん、羅刹が制止した。
「ちょっと待ってください。残りの2人も呼んできますので、話はそれからお願いします！」
「そうですか、それでは・・・」
伎芸天は地面にちょこんと正座をし、背筋をぴんと伸ばして待った。
羅刹は、なんか調子狂うなと思いながら車内の2人を呼びにいった。
羅刹に続いて、2人がやってきた。夜叉姫と般若は、伎芸天を見てぎょっとした。困った、今までに無いタイプだ、どうしよう・・・
2人がオロオロしていると、羅刹が伎芸天の正面に正座した。2人もそれにならって正座する。
伎芸天は改めて、3人に礼をした。3人も礼をする。彼女は改めて話し出した。
「それでは改めてご挨拶を、私は伎芸天と申します。『観音』様の下で侍女をしております。初めまして羅刹様、夜叉姫様、般若様。実は、私『観音』様の命を受けて、あなた様方を屋敷まで案内するように頼まれました。いささか御無礼があった様で大変失礼いたしました。」
彼女は、また深々と礼をした。3人もつられて礼をする。夜叉姫がすまなそうな口調で話す。
「こっちこそごめんなさい。殺し屋と間違えてぶっ飛ばそうとしちゃった。」

「いえいえ、こちらこそ。紛らわしい真似をいたしました、どのような罰でも受けますので、どうかご勘弁を。」
般若が、それじゃあ・・・と言いそうになったが止めておいた。この手のタイプは冗談が通じないだろうと。
伎芸天が、すくっと立ち上がり話した。
「それでは、観音様のお屋敷までご案内いたします。私の後についてきて下さい。」
彼女はバイクにまたがり、ヘルメットを被った。3人も車に戻り、伎芸天が走り出すのを待った。だがいっこうに走り出さない。
羅刹はたまりかねて、伎芸天に話しかけた。
「あのーどうしたんですか?」
伎芸天はバイクを降りて、車に駆け寄ってきた。
「モゴモゴ、モゴモゴ。モゴゴ・・・」
だから、ヘルメット取って喋りなさいって・・・と羅刹は言いかけると、彼女は気が付いてヘルメットを取った。
「あ、あの・・・誠に申し訳ないのですが、ガソリンが無くなってしまいまして。よろしければ乗せて頂けないでしょうか?」
3人は車内で、ずっこけた。4人は車にバイクを積んで、走り出した。後部席には羅刹と伎芸天、助手席に般若を乗せて。

後部席では、真っ赤になって俯(うつむ)いている伎芸天が申し訳なさそうに話した。
「申し訳ありません・・・私ったら本当にドジで。観音様にもいつも怒られてるのに・・・」
横に座っている羅刹が、半べそをかいている彼女をなだめる。
「気にしないでくださいね。ところで、観音様ってどういう方なんですか?」
すると伎芸天の顔が、ぱあーと明るくなって一気にまくしたてた。
「は、はい!観音さまはですね、とってもお美しくて優しいくて凛(りん)としていて素晴らしい方なんです!あの方にお使えしてとっても幸

せです。同じ女として見習わなければなりません！」
助手席に座っている般若が、びっくりした顔で話した。
「え！観音様って女の人だったの？てっきり大賢者って言うから、弥勒のじじいと同じ老人かと思った。」
伎芸天は少し、むっとして般若に切り返した。
「それは観音様に失礼ですわ、般若様！大賢者の中でも美貌と博識（はくしき）を備えた方を、あんなじいさんと一緒にして頂きたくないですわ。」
仮にも育ての親である、弥勒をあんなじじい呼ばわりされたが、まあそりゃそうだなと3人は納得した。
夜叉姫が、笑いを堪えて伎芸天に話しかける。
「あのさー伎芸天さん。」
「はい、なんでしょうか？夜叉姫様。」
夜叉姫がちょっと迷った顔をしたが、意を決して話した。
「伎芸天って呼びにくいからさ、ぎっちゃんて呼んでいい？」
羅刹は怒った顔をして、夜叉姫の頭を小突いた。
「ばか！観音様の使者に向かってなんてことを！」
伎芸天は羅刹を制止し、にこにこ笑って話した。
「かまいません、怒らないでください羅刹様。ぎっちゃん・・・ぎっちゃん。はい、気に入りました。これから私の事を、ぎっちゃんとお呼びください。ありがとうございます！夜叉姫様。」
夜叉姫以外の2人の目が、点になっている。羅刹は気を取り直して、伎芸天にたずねた。
「あ、あのう。本当に良いんですか？怒ってません、伎芸天さん。」
伎芸天は首をふるふる振って、微笑んでいる。
「怒るだなんて滅相もありません。私、嬉しいんです。渾名なんて付けられた事ないですから。これから、ぎっちゃんて呼んで頂かないと返答しないのでご了承くださいませ。」
真面目な顔をして、この人は何を言ってるんだろう・・・そう思うと、3人はたまらなく可笑しくなった。彼女達はおさえきれず大きな声で笑い出した。

車内は、笑い声でみたされる。伎芸天は、きょとんとしている。そして、彼女らにたずねた。
「え、え？みなさんどうされたんですか。私何か可笑しな事でも言ったのでしょうか？」
羅刹は、笑いながら伎芸天に答えた。
「ううん、なんでもないの。これからよろしくね、ぎっちゃん。なんか、あなたとはいい友達になれそうよ。」
前に座っている2人も、口々に言う。
「あたしも、友達だよ。ね、ぎっちゃん。」
「しょうがないわね、じゃあわたしも友達になったげるわ。よろしくね、ぎっちゃん。」
すると伎芸天は、ぽろぽろと涙をこぼしている。それを見た羅刹は、ちょっとからかいすぎたかな、と思って心配そうな顔をしている。
「どうしたの？ぎっちゃん。ごめんね私達ちょっと、調子に乗りすぎたみたい。」
伎芸天は鼻をすすりながら、首をふりいえいえと否定している様子。
「違うんです、嬉しいんです。私こんな性格だから、小さい頃から友達が出来なくて・・・それで観音様の所に行儀見習いとして奉公（ほうこう）に行ったんです。観音様はお優しくて、素敵な方なんですが、友達がいなくてずっと寂しかったんです。それが、皆さん私を友達と言ってくれて。それがとっても嬉しくて、嬉しくて。」
すんすんと泣いている伎芸天を見て羅刹は、堪らなくなって彼女を抱きしめた。
「やーん。ぎっちゃんたらかわいい～！」
急に抱きつかれた伎芸天は、びっくりして。
「ぎゃっ！お戯れを羅刹様～私そういう趣味はございませんので～」
車内は、わいわいと楽しげな空気に満たされる。そうして、彼女たちを乗せた車は須弥山に向かって走り出す。

だんだん彼女達は、目的地である須弥山に近づいてきた。近づくにつれて、周りの風景が賑やかになってくる。
宿屋があり、酒場、レストラン、土産物屋など様々。車から顔を出している般若が、感心した様な声をだす。
「へえー、ここら辺って結構賑やかなんだね。色々なお店があるよ。」
すると伎芸天は、にっこりと笑って話し出す。
「須弥山は観光地なんです。週末になると、多くの観光客で賑わいます。それにこの地方は土が肥えてて、農作物も豊かなんですよ。」
「そうなんだー、ていうか観光地に大賢者が住んでるの？」
般若が驚きの声を上げていると、伎芸天はちょっと恥ずかしそうにしている。
「は、はい。観音様は、自分の美貌を大衆の皆さんに見てもらおうと思って、山頂にお屋敷を建てたんです。」
般若は呆れた顔をして、ぽつりと呟いた。
「大賢者って、変わり者しか成れないのかしら・・・」
車は、再び速度を上げて走り出す。須弥山の山頂に向かって。

走ること3時間、辺りはもう暗くなりかけている。山頂に着いた彼女達は車から降り、眼前に見える屋敷をみて驚いた。
きらびやかに装飾された大きな門、金色に輝く屋敷は、日が沈みかけているというのにキラキラと光っている。
3人は、口をあんぐりと開けて言葉が出ない。暫くして、3人はそれぞれに感想を述べだした。
「はーすっごいね～キラキラだよ～」
「あれって、金よね・・・金があんなに、いくら位するんだろ？」
「うわ・・・趣味わるーい。」
伎芸天が苦笑いを浮かべながら、門の前にたって大きな声をかけた。
「伎芸天です！ただいま戻りました。開門お願いいたします！」

門が、ぎぎぎと音を立てて開いた。伎芸天は門番にお辞儀をして、3人に中に入るよう促した。

「さ、皆さん、こちらへどうぞ。」

3人は伎芸天に連れられて、中に入る。中庭を抜けて屋敷の中に入り、大広間に案内された。大広間には、様々な猛獣の剥製(はくせい)が飾ってある。伎芸天は、また大きな声で話し出す。

「観音様。伎芸天、ご命令にしたがい羅刹様、夜叉姫様、般若様。以上3名様をお連れいたしました！」

暫くして、大広間の奥から女性が現れた。背が高く、腰まで届く黒髪、そして豊満な胸。キラキラとした服は、彼女の非の打ち所が無いスタイルを強調している。まさしく絶世の美女が、羅刹ら3人の前に現れた。

そして、琴を爪弾(つまび)くような声で彼女らに話しかけた。

「ご苦労であった、伎芸天。そなたらが羅刹、夜叉姫、般若であるか、わらわが観音である。」

二章の3　浪速（なにわ）の徳さん

３人は観音見て、戸惑っている。たしかに観音（かのん）は女性と聞いていたのだが、ここまで容姿端麗（ようしたんれい）な女性だったとは予想もしていなかった。

３人が言葉をなくしている時、観音は不思議そうにしている。

「なんじゃ？お主らどうしたのじゃ。そう堅くならずともよい、楽にいたせ。」

ほほほ、と観音は微笑を浮かべる。その様はまるで天女の様で、その溢れる気品は神々しくある。

我に返った羅刹（らせつ）は、丁寧にお辞儀をした。夜叉姫（やしゃひめ）と般若（はんにゃ）はそれを見て、慌ててお辞儀をする。

「し、失礼いたしました。わたしが羅刹でございます。こちらの小さい子が夜叉姫、もっと小さいのが般若と申します。大賢者の１人であらせられる観音様にお初にお目にかかれて、大変嬉しく思っております。」

羅刹の挨拶に、２人はちょっとカチンと来た。が、羅刹から発せられる緊張感たっぷりのオーラが２人を黙らせた。

伎芸天（ぎげいてん）が観音の傍（かたわ）らに近づき、そっと扇子を渡す。扇子を手にし、少し広げ口元を隠し話し出す。

「丁寧な挨拶痛み入る。お主ら、『ＡＳＨＵＲＡ』の事でわらわの所に来たのじゃったな。」

「はい。さ、左様でございます。弥勒様が仰（おっしゃ）られるには、観音様は『ＡＳＨＵＲＡ』について何か知っているのではないか。と、言うのでこうして会いに来たわけでございます。」

観音は扇子をぱちんと閉じ、深海の真珠のような頬に当てている。

そして、少し悪戯っぽく話した。

「確かに『ＡＳＨＵＲＡ』について知ってはおるが・・・ただで、と言う訳にはいかぬぞ。」
夜叉姫が、親指と人差し指を丸くあわせ。観音にたずねた。
「これ？」
観音は、ぷっと吹き出した。そして、軽く微笑んで夜叉姫に答える。
「なんじゃそれは？ああ、金か。違う、違う。金などいらぬわ。」
次に般若が、顔を真っ赤にしてたずねる。
「わかった！わたしの身体ね。」
「違う、お主の様な童女に興味はない。」
最後に羅刹が、意を決した顔をして。
「わかりました、私がお相手いたします。ここまで来て、手ぶらで帰るわけにはいきません・・・一晩だけなら・・・」
「違うとゆうに！お主ら気は確かか、わらはにその様な趣味はない！」
なんだ違うのか、この手のタイプはてっきり・・・羅刹と般若は、そう思った
観音は呆れた顔をして、ため息をついている。伎芸天はそれを見て、声を殺して笑っている。観音にこの様は対応をしてきた者を、初めて見たからだ。それを観音は見逃さず、伎芸天をジロリと睨み話を続けた。
「全く・・・金も、お主らの身体もいらぬわ。わらわは大の格闘好きでの、自分でするのも見るのも大好きなのじゃ。この部屋にある剥製があるじゃろ？これらは全て、わらわが退治してきた物なのじゃ。」
３人は、部屋に飾られてある剥製を見渡した。どれもこれも、般若の３倍はある物だった。その全ては子供でも知っている位、獰猛で恐れられている物ばかりだった。彼女たちは感嘆の声を漏らしている。
「そこで、提案がある。わらわ達とお主らが試合をして、お主らが勝てば『ＡＳＨＵＲＡ』の事を教えてやろう。」

羅刹は、ちょっと考えて他の2人を見た。
「どうする？私は構わないけど・・・」
夜叉姫も、別に困った顔をする訳でもなく話す。
「いいんじゃない。勝てばいいんでしょ？」
2人の様子に戸惑っている般若は、慌てて話し出す。
「ちょっとちょっと！冗談じゃないわよ。わたし武道の心得なんかないわよ！」
羅刹は、困った顔をして考えてる。少しして、羅刹は観音にたずねた。
「観音様、ちょっとよろしいでしょうか？」
「なんじゃ？申してみよ。」
羅刹は申し訳なさそうに、話を続ける。
「私と夜叉姫は武道の心得がありますが、こちらの般若はまだ幼く、武道の心得がございません。私と夜叉姫で、試合をさせて頂きたいのですが・・・」
観音は優雅に微笑んで、羅刹の提案に答える。
「ああ、かまわぬぞ。それではこちらも2人で応えようぞ。そうじゃな、1人はわらわが相手をするとして・・・うむ、伎芸天。お主が相手をいたせ。」
急に話を振られた伎芸天は、びっくりした顔をして戸惑っている。
「え？私でございますか？そんな無理です！羅刹様達と闘うなんて、無理でございます！」
観音は伎芸天の願いを意に介さず、にっこり笑って彼女に話す。
「何を言っておるか、お主の実力はわらわが一番よく知っておる。なんだったら、お主1人であやつらを相手にしてもよいのだぞ？」
扇子を口にあて、ほほほと笑っている観音をみて、般若がくってかかった。
「ちょっと待ちなさいよ！ぎっちゃんも強いかもしれないけど、羅刹と夜叉姫もそうとうなもんだからね。ぎっちゃんや、年増のおば

さんなんかに負けるわけないじゃない！」
般若の言葉を聞いた観音のこめかみの血管が、ぴくぴくと動いた。
「今、なんと申した。もう一度いってみよ・・・」
般若は、すこしムカッときて一気にまくしたてた。
「何度でも言ってやるわよ！年増のおばさんって言ったのよ。わたし達からみたら、あんたなんかおばさんじゃない。ちょっとスタイルは良いけど、結構若作りしてるみたいだし。おばさんが気に入らなかったら、ばばあとでも呼んであげましょうか？」
観音は、ぶるぶると震えだし異様なオーラを発している。それを感じ取った伎芸天は、慌てて般若に話しだした。
「だめです！駄目です般若様！！あやまってください、早く謝ってくださらないと大変なことに。」
大広間は、観音が発したオーラに満たされた。すると鮮やかな黒髪がみるみるうちに、銀色に変わっていった。するといままで優雅だった観音が荒々しい顔つきに変わり、鋭い目つきで3人を見据えた。
「おい、コラわれ。言うてはなんらんことを言うてもうたな。」
顔つきだけではなく、口調まで変わってしまっている。その横で伎芸天が、頭を抱えて手遅れだったという顔をしている。
「ああ・・・もう遅かったようですね。」
羅刹らは、観音の変貌振りに唖然としている。急な展開についていけず、頭を整理しようとし、羅刹はとりあえず伎芸天にたずねる。
「ちょ、ちょっと、ぎっちゃん。どういうこと？どうなっているの。」
伎芸天は、羅刹らに駆け寄りため息混じりに話した。
「実は観音様は、多重人格でして。普段は優しくて凛としている人格なんですが、自分の美しさを否定されたり、年齢の事とかを言われるともう1つの人格が現れるのです。今、私達の前にいるのは浪速の徳次郎、通称『浪速の徳さん』です。徳さんは主人格の観音様と違い、荒々しくて下品なんです。そして、こよなく焼酎を愛しています。」

最後の焼酎はどうでもいいとして、羅刹はもう一度伎芸天にたずねてみた。
「どうやったら元の観音様にもどるの？」
「ああなってしまったら、当分の間は徳さんのままです。早くて５日、長いと１ヶ月はあのままです。」
伎芸天と羅刹らが話をしている様子を見て、観音はイライラしだして大声で怒鳴った。
「おのれら、さっきからなにをグチャグチャ話しとるんじゃい！ちゃっちゃと始めたらんかい！」
観音は足を大股に開き、下着をあらわにして座っている。そして下着に手を入れ、股間をぼりぼりとかきだした。それを見た伎芸天は、真っ赤な顔をして注意をする。
「ぎゃー！何をなさっているのですか。駄目ですよ、そんなところに手を入れては！」
観音は、面倒くさそうな顔をして答える。
「うっさいわ、ボケ！そんな事より早いこと始めんかい。最初はおまえと、そやな・・・おい、そこのええ乳したねえちゃん。」
羅刹は、自分を指差しきょとんとしている。
「わ、私ですか？」
「おう、そや。最初の試合は、おのれと伎芸天がやるんや。」
伎芸天と羅刹は、お互い見詰め合って苦笑いをしている。
「おい、なにをしとるんじゃ！さっさと始めんかい。」
伎芸天は意を決して、羅刹に話しかける。
「羅刹様、こうなっては仕方がありません。試合を始めましょう。」
「う、うん・・・わかったわ。」
２人は覚悟を決めて、大広間の中央に歩き出した。

２人はお互い距離をとり、呼吸を整えている。そこで、観音から試合開始の合図がかかる。

「よっしゃ、始め！」
開始の合図がかかると、２人は構えた。お互いの間をとり、じりじりと詰め寄る。最初に動き出したのは羅刹。羅刹は長い足を繰り出し上段に蹴りを放つ、伎芸天はそれをぎりぎりでかわし、後方へ下がる。
「あ、あぶなかったです。もう少しで当たるところでした・・・」
羅刹は、さすがにこれは外すか。と思い床を蹴り、一気に間を詰める。そして物凄い速さで、上段、中段、下段と３連続の蹴りを放つ。伎芸天は、上段と中段の蹴りをかわし受け止めた。だが、下段の蹴りが彼女の足に当たる。バランスを崩した伎芸天を見逃さない羅刹は、伎芸天の腹に向けて拳（こぶし）を繰り出した。まともに拳を喰らった伎芸天は、たまらず床に倒れた。
その様子を見ていた夜叉姫と般若は、歓喜の声をあげる。
「おーさすが羅刹。でもちょっとは手加減してほしいな、ぎっちゃんは友達だもんね。」
「あんた、何いってるのよ！仕方ないでしょ、試合なんだから。勝たないと『ＡＳＨＵＲＡ』の事、聞き出せないじゃない。」
羅刹は、伎芸天の傍らに立っている。彼女を見下ろして、悲しそうに話し出す。
「ぎっちゃん、もういいでしょ？私達、友達じゃない。ぎっちゃんじゃ私に勝てっこないよ・・・」
観音は、イライラしている。そして伎芸天に向かって檄（げき）を飛ばした。
「おい、伎芸天！いつまで遊んどるんじゃ。そんなもん、全然効いてへんやろ。早いことあれだして、さっさと終わらせ！」
その言葉を聞いた伎芸天は、ダメージを受けていない様な顔をして立ち上がった。そして床を蹴り、後方にさがり羅刹との間をとった。彼女は深く息を吸い、静かに息を吐く。しばらく間をおいて、彼女はつぶやいた。
「闘舞（とうぶ）・・・摩利支天（まりしてん）・・・」
伎芸天は、両の手を前方に構え腰を落とし構えている。そして、物

凄い速さで羅刹との間を詰める。間髪いれず伎芸天は、手刀を目にも止まらぬ速さで数発繰り出した。だが羅刹も見事な動体視力で、それらをかわしいなす。しかしかわし損ねた手刀が、羅刹の頬をかすめた。頬には赤い筋ができ、うっすら血が滲んでいる。

「や、やるじゃない・・・ぎっちゃん。かわしたと思ったんだけどね。」

伎芸天は、羅刹の言葉に耳をかさない。ただ黙って、彼女の様子を見ている。夜叉姫と般若が、はらはらしながら見ている。

「どうしちゃったんだろ、ぎっちゃん。さっきと全然雰囲気が違う・・・」

「なんか、怖いよ・・・」

2人の会話を聞いた観音は、くくくと笑い話しだす。

「あれはな、わしがが教えたった『闘舞』っちゅう呼吸法や。今、伎芸天がやっとる闘舞は摩利支天やな。これは自分を一切無くし、ただ相手を倒すことしかせえへん。あいつの前に立っとるのは友達やあらへん、ただの敵になっとる。」

観音の言葉は、羅刹にも聞こえた。すこし、苦笑いを浮かべて構える。

「なるほどね・・・私は敵ってことね。じゃあこっちも本気出すしかないわね・・・」

羅刹は、急に身体の力を抜いた。そして、目を閉じて俯いた。暫くして、羅刹の周りの空気が歪んだようにみえる。

彼女が身体に再び力を込めたとき、暗黒のオーラが部屋中に満ちていった。

「あんまりこれは・・・使いたく無かったんだけどね・・・」

羅刹は構えをとり、片足を上げている。

「芭蕉・・・旋風脚・・・」

上げた片足を、一気に振り上げた。その風圧が、伎芸天めがけて放たれた。その風圧はかまいたちの様で、ぎりぎりかわした伎芸天の横をすり抜ける。標的を失ったかまいたちは、部屋に飾ってある剥

製の首を落とし消滅した。
それを見た観音は、にやにやしている。
「へー、あのねえちゃんやりよるなあ。あれ弥勒の『芭蕉旋風脚』やんけ、これは面白なってきよったで。」
伎芸天は、羅刹の放った技をみても眉ひとつ動かさない。一気に間を詰めて、彼女も足技で羅刹に挑む。
そして、お互いの足技の応酬が始まった。肉と肉がぶつかる音、骨と骨が軋(きし)む音が部屋中に響き渡る。
汗と血を飛びちらせ、彼女達はお互いに相手の隙をうかがっている。
その状態が時間にして２０分以上続いた時、２人の動きが止まった。
それもそのはず、お互いにほぼ無呼吸状態で闘っていたのだ。彼女達は、これが最後の技と決めて渾身(こんしん)の力を込めて足技をくりだした。
鈍い音が部屋中に響き渡り、時間が止まったような錯覚すら覚える。
２人はお互いの急所を捉え、動きが止まっている。
そのまま彼女達は気を失い、床に倒れこんだ。

「羅刹ー！ぎっちゃん～！」
夜叉姫、般若は２人の所に駆け寄った。夜叉姫は羅刹の傍らに、般若は伎芸天の傍らに寄り添って心配そうにしている。
観音も彼女等の傍(そば)により、拍手をしながら話した。
「２人ともようやった、ひさびさに見る名勝負やった。おまえらそんなに心配すな、気を失っとるだけや。」
観音が、ぱんぱんと手を叩き呼びかける。
「おーい、誰か。この２人を、看護室に連れていったって。しっかり治療したってや。」
数人の使用人がやってきて、羅刹と伎芸天を担架にのせ連れて行った。夜叉姫と般若も付いていこうとするが、観音に呼び止められた。
「おいおい、おまえらどこ行くねん。赤毛のねえちゃんは、わしと

試合せな。そこのジャリん子は、見とかなあかんやん。」

二章の４　観音様・・・下着見えてますよ

呼び止められた夜叉姫、般若は身構えた。先ほどの羅刹と、伎芸天の死闘をみて動揺している。

彼女達は出来れば羅刹らの傍にいたい、だが『ＡＳＨＵＲＡ』の事を聞きだすには観音との試合に勝利しなければならない。

その葛藤が、彼女らを動揺させる。それを見透かしたように観音は静かに微笑み、彼女ら安心させる。

「大丈夫やって、心配いらん。あの使用人達はこんなん慣れとる、任しとったらええ。それより赤毛のねえちゃん、今度はおまえの番や。早いこと、始めよやないか。」

夜叉姫は、覚悟を決めた。もう、後には引けない。観音に勝利することが、一番の解決策だと。

「わかったよ、観音さま。いや、徳さん。」

普段は明るく、陽気な夜叉姫が真剣な顔をしている。般若は心配している。付き合いは短いが、自分の事を妹と言ってくれた人だ。

今では、本当の姉の様に思っている。羅刹があんなことになってしまって、般若は気が気ではない。

「夜叉姫・・・だ、大丈夫だよね？絶対無理しないでね。」

夜叉姫は、にっこり笑って答える。

「大丈夫だよ、あたしは強いんだから！」

精一杯強がって見せたが、内心不安で仕方がない。伎芸天にあんな格闘術を教えた観音だ、当然かなりの使い手に違いない。だが般若の手前、不安を見せるわけにはいかない。覚悟を決めた夜叉姫は、観音に近づく。

「こっちは、いつでも行けるよ。さあ、やろうよ。」

「ほう、ええ眼つきやな。覚悟は出来たみたいやな。」

2人は、部屋の中央に歩き出した。夜叉姫は弥勒に貰った籠手(こて)を、かちんかちんと合わせている。彼女の籠手を見た観音は、感嘆の声を上げた。

「その籠手、弥勒のもんやんけ。さっきのねえちゃんといい、お前といい、よっぽど弥勒に気に入られとるな。」

夜叉姫は、観音の言葉に答えない。両手を前方に構え、いつでも闘える準備だ。

「よっしゃ、始めるで。」

観音の開始の合図がかかった。夜叉姫が構えているにもかかわらず、観音は腕を組み、ただ立っているだけ。

「どうしたの、なんで構えないの。」

観音はとぼけた顔をして、答える。

「ああ、これか?気にすんな、これがわしの構えや。早いことかかっておいで。」

夜叉姫は、一層緊張した。わかっていたのだ、観音と対峙してから刺すような気をビリビリと感じる。手を出したいが出せない、しかし出さなければ勝つことが出来ない。あせる気持ちが、彼女の決心を鈍らせる。

「おーい、どないしてん。にらめっこしててもしかたないやろ?けえへんねやったら、こっちから行くで。」

夜叉姫の額から、汗が流れる。行きたいが行けない、構えて様子を伺うことしか出来ない。その時、一瞬だが観音が目をそらした。

彼女は疾風の如く駆け出し、観音との間合いを詰める。懐(ふところ)に飛び込んだ彼女は、無数の拳を繰り出した。

観音は左手を出し、それらをことごとく受け止める。夜叉姫が最後に放った拳を掴み、彼女に向かって話し出す。

「ははは、ひっかかったな。なかなか手え出してこんから、隙をつくったんやけど。見事にひっかかったな。」

拳を掴みながら観音は余裕をもって話すが、夜叉姫の顔は苦痛に歪んでいる。それもそのはず、彼女の拳は物凄い握力で締め付けられ

ているからだ。夜叉姫は、堪らず観音の左手に蹴りを放つ。それを感じ取った観音は、手を離す。放たれた蹴りは空を切ったが、夜叉姫の拳は開放された。

開放された拳を、夜叉姫はさすっている。骨には異常はない様だが、暫くは動かせないだろう。拳をぶらぶらさせながら、彼女は考える。このままいってもただ悪戯に体力を消耗するだけ、ならば短時間で一気に決めるしかないと。

夜叉姫は腰を落とし、下腹に力を込める。ふるふると身体が震え、彼女の周りの空気がびりびりと張り詰める。一瞬の間があき、夜叉姫の琥珀色だった眼が赤くなった。

「ふー。ふー。虚空・・・夜叉明王撃！！」

放たれた弾丸の様に、夜叉姫は観音に飛びかかっていった。爪を立て、獣の様な掌低を繰り出す。先ほどの攻撃とは比べ物にならないほど、速さと殺気がこもっている。普段のあどけない夜叉姫からは、想像も付かないほど鬼気迫る表情をしている。

だが、観音の身体には一切ふれない。夜叉姫の変貌ぶりに、彼女はぽつりと呟く。

「弥勒のボケ・・・こんな子供に『虚空夜叉明王撃』なんか教えやがってからに・・・」

夜叉姫は後方に下がり、止めとばかりに渾身の力を込めて飛び上がった。もはや獣と化した彼女は、観音という獲物に向かって行った。

ふうと、ため息を付いた観音は、初めて構えをとった。

「鉄波千手観音掌・・・」

前方に構えた掌を、一気に突き出す。気をまとった掌から幻影がみえる、その幻影は拳の様な形状をし、観音の掌から放たれる。

それは無数にあり、名前の如く千はあろうかというものだった。それが上空にいる夜叉姫に、上下左右と向かっていく。逃げ場のない彼女に、それはことごとく当てられた。夜叉姫は悲鳴をあげ、力尽き落下していった。

「わるう思いなや。こうでもせんと、おまえは自分の技に身体を犯

されてまうとこやった。あの技は、おまえのような子供が使うもんやない。全く・・・『芭蕉旋風脚』といい、『虚空夜叉明王撃』といい。弥勒のボケは何考えとんねん。」

観音は歩きながら独り言のように、ぶつぶつと言い夜叉姫の傍に近づいていった。その時、後方から凄い殺気を感じた。

「なんや、この殺気は・・・」

振り返ると、殺気を発していたのは般若だった。彼女は、宮毘羅から貰ったクナイを念動力で宙に浮かせ観音を狙っている。

「よくも・・・よくも・・・」

般若は我を失っている。よく考えてみれば、観音を恨むのは筋違いなのだが、幼い彼女にはそれが理解できない。

姉と慕っている彼女達が倒れてしまった今、敵をとるのは自分しかいない。自分にはそれが出来る。

４本のクナイは、観音を狙っている。身構えた般若がクナイに気を送る、待っていたとばかりにクナイは解き放たれた。

上方から2本、左右から1本づつ観音めがけ飛んでくる。

「ちっ！」

観音はそれらをかわす、が意思を持ったかの様なクナイ達は間髪いれず襲いかかる。埒があかないと思った彼女は呟く。

「闘舞、韋駄天」

そう唱えると観音は、速度を加速した。般若は観音は消えてしまったと思い、動揺している。その時、自分のすぐ後ろに気配を感じた。だが、感じた時にはもう遅かった。観音は手刀で、般若の首筋を軽く打ちつけた。そのまま般若は気を失い、４本のクナイも地に落ちた。

「このジャリん子、『念動力』の使い手やったんか。つくづく恐ろしいガキどもやで。」

観音は夜叉姫、般若を両肩に抱え看護室へと歩いていった。

どれくらい時間が経っただろう、暫くして羅刹が目を覚ました。

上半身を起こし自分の身体を見る、手厚い治療がしてあり痛みもほとんど無い。横をみると伎芸天にも同じく寝ている、彼女にも手厚く治療がしてあり寝息を立てている。それを見た羅刹は、ほっとしている。

「おう、目え覚めたか。身体(からだ)は痛とうないか？」

椅子に腰掛け、大股を開き1升瓶を抱えた観音が声を掛けてきた。

羅刹は観音にお辞儀をして、真っ赤な顔をして話しかける。

「は、はい・・・大丈夫です。あ、あのそのう・・・観音様・・・下着見えてますよ・・・」

観音は自分の姿をみて、高笑いをした。

「ははははは！かまへん気にすな。それに今は観音は眠っとる、徳次郎でかまへんよ。ええ乳したねえちゃん。」

気にするなって言われても、そこまで開けっぴろげにされると同じ女性としてもさすがに照れる。1升瓶を口につけ、グビリと飲み観音は羅刹に問いかけた。

「おまえら、あんまり無茶しなや。今回はこれ位ですんだけど、ちょっと間違とったらこんなもんやすまんかったで。」

「はい・・・すいません・・・」

観音は羅刹を、じっと見てため息をついた。そしてまた酒を飲みながら、真剣な顔をして言った。

「あんまり良く解ってないみたいやから、はっきり言うたるわ。おまえら『芭蕉旋風脚』と『虚空夜叉明王撃』な、あれはもう使うな。おまえの技はともかく、赤毛のねえちゃんには絶対使わせたらあかん。あれはあんな子供が使う技やない、あれは自分の殺気を増幅させて、相手を殺すまで止まらん技や。あんな年端もいかん子が、人を殺めるなんて事したらあかん・・・」

羅刹は、ただ黙って聞いている。だったらなぜ弥勒様は、私達にあんな技を教えたのだろう・・・いろんな事が、ぐるぐると頭の中を駆(か)け巡(めぐ)る。だが、答えはでない。ふと気づき、羅刹は観音にたずねた。

「かの・・・いえ徳次郎さん。夜叉姫と般若は？」
「ああ、あいつらな。ジャリん子はまだ眠っとる、赤毛のねえちゃんは・・・」
言い切らないうちに、部屋の外からドタドタと走ってくる音が聞こえてくる。勢いよく扉が開き、夜叉姫が走りこんできた。
「羅刹ー羅刹！大丈夫、大丈夫なの？」
夜叉姫は羅刹に抱きつき、子犬の様にじゃれついた。羅刹は彼女の頭をなでて、にこりと笑う。
「大丈夫よ、心配しないで。それよりあんた、徳次郎さんと試合しなかったの？」
「したよ、したけど負けちゃった！徳さんすごいんだよ～すっげー強いの。」
観音は、２人のやり取りを見て微笑んだ。
「ところで、約束の事やけどな。一応ワシらの勝ちや、『ＡＳＨＵＲＡ』の事は教えられへん・・・と言いたいところやけど、もう１回機会をやる。」
羅刹と夜叉姫は、不思議そうな顔をしてたずねた。
「機会って・・・何ですか？」
「まあ、その話は明日にでもしようやないか。今日はとりあえず休んどき、ほなワシはこれで失礼するわ。」
観音はそう言って、部屋を出て行った。羅刹らは、少し不安ながらも希望が見えたきた。

夜が開け、観音は羅刹ら３人と伎芸天を大広間に集めた。使用人たちの治療は完璧で、彼女達はすっかり回復している。元々、彼女達の人並みはずれた回復力も手伝ったのだろうが。
観音は彼女達の前に立ち、悪戯っぽい目をして話し始めた。
「昨日も言うた通り、おまえら３人はワシとの勝負に負けた。せやけどおまえらは、中々見込みがある。そこでや、おまえらに『闘舞』

を覚えてもらう。それを習得したら、『ＡＳＨＵＲＡ』の事を教えたる。どや、悪い条件やないやろ？」

伎芸天は、びっくりした顔をしている。

「観音様、それは無茶でございます！少なくとも『闘舞』を習得するには、５年以上かかります。」

３人は揃って、目を大きく開けて口々に文句を言い出した。

「ちょ、ちょっとまってよ。５年ってそんな時間ないよ！」

「そうです！私達は一刻もはやく、『ＡＳＨＵＲＡ』を見つけ出したいんです！」

「２人の言うとおりだわ、わたしには『念動力』があるのよ！『闘舞』なんて必要ないわよ。」

羅刹らが、ぎゃーぎゃー言っているのを一喝する。

「じゃっかしいわい！なにも『闘舞』の全てを習得せえ言うてへんわい。ええ乳したねえちゃんと、赤毛のねえちゃんの技は昨日言うたように使ったらあかん。そこで、『闘舞』を覚えてもらう。それにな、『闘舞』はなにも格闘術だけやない心身を鍛える技もある。」

彼女は、こほんと咳払いをして話を続ける。

「そこでや、ええ乳したねえちゃんには『闘舞黒闇天』を覚えてもらう。おまえは足技が得意な様やからな、うってつけや。赤毛のねえちゃんは『闘舞不動明王』、これは自分の力を倍増させる技や。最後にジャリん子、おまえは頭に血が上るとなにするかわからん。そんなおまえには、『闘舞弁財天』。これは心を落ち着かせる技や、まあ明鏡止水の如くってこっちゃな。」

羅刹は、手を挙げておずおずとたずねた。

「その技をかの・・・じゃなっかた、徳次郎さんが教えてくれるんですか？」

観音は、即答する。

「うんにゃ、ワシは教えへんで。」

その言葉を聞いた般若は、くってかかる。

「ちょっと待ってよ！だったら誰が教えてくれるっていうのよ！！」

「話は最後まで聞け、こっから東に５０ｋｍほど行った所に『象頭山』って山がある。そこが『闘舞』の修行の場になっとる、そこで各々の技を習得してこい。」

伎芸天は心配そうな顔をして、彼女らに話す。

「みなさん、頑張ってくださいね。みなさんなら、短期間で習得できます。私はここで、お帰りをまっていますから。」

観音は伎芸天の頭を、こつんと叩き話す。

「どあほ、おまえも行くんや。」

「えーーーー！！？」

伎芸天は、おおきな口を開けて驚いた。観音は、それを意にも介さず話を続ける。

「おまえは『闘舞摩利支天』を完璧にしてこい。ついでに『闘舞韋駄天』も習得してきたらええ。」

「そ、そんなあ・・・私は２つも習得するんですかあ・・・」

伎芸天は、がっくりと肩を落としうな垂れている。

「そうと決まったら、早速行って来い。伎芸天、案内はおまえに任せたからな。」

「はい・・・かしこまりました。それではみなさん・・・出発しましょうか・・・」

彼女達は観音の屋敷を後にし、修行の場である『象頭山』を目指した。

羅刹は、『闘舞黒闇天』を習得する為に。

夜叉姫は、『闘舞不動明王』を自分の物とする為。

般若は、『闘舞弁財天』で心の安定を得るために。

案内役の伎芸天は、『闘舞摩利支天』を完璧にし、ついでに『闘舞韋駄天』を得る為に。

恐らく大変な事に成るであろう、だが彼女達は何も知らない。修

行というのは、そういうものと昔から決まっているのだから・・・

箸休め　3姉妹、午後のお茶会

羅刹（以下、羅）「はい、お疲れさま。今回は第一回目ということで、豪華なおやつがありまーす。かぼちゃのプディングとかぼちゃのタルト、飲み物はロイヤルミルクティーですよ。」

般若（以下、般）「豪華って・・・ロイヤルミルクティーはともかく、その他はハロウィンの余りじゃないの。」

夜叉姫（以下、夜）「なんでもいいよ～わぁーおいしそ！いただきます。」

般「で、なんなの？わたし達修行の為に『象頭山（ぞうずざん）』に向かったんじゃなかったの？」

羅「今回はね、箸休めって事で私達のお茶会＆座談会なのよ。」

夜「座談会ってなにするの？」

羅「普通ならこれまでの物語を振り返る、って事なんだけど。まだ１３話だし、それはまたって事にして。今回の座談会は、『ＡＳＨＵＲＡ』の設定について３人でお話しようと思ってるの。」

夜＆般「設定？」

羅「そ、設定。ていうか私達の名前の由来とか、世界感の話ね。」

般「羅刹、夜叉姫、般若の名前になにか由来でもあるわけ？」

夜「無いとおもうな～思いつきで名づけられたと思うんだけどな。」

羅「そうなんだよね・・・私もそう思うんだけど、ここに一応設定資料があるのよね。」

夜「へー見せて、見せて。」

羅「ちょっと待ってね。この資料によるとだね、羅刹、夜叉姫、般若。と他に阿修羅って女の子がいるのよね。」

般「え？ちょっと待ってよ。阿修羅って女の子が出る予定だったの？」

羅「そ。その阿修羅って女の子は『念動力』の持ち主で、私達の前に突然現れて世界を巡る旅をする。
って話なんだ。」

般「その阿修羅って女の子、まんまわたしじゃないの・・・じゃあ最初の設定の般若はどういう子なの？」

羅「えとね・・・初期設定の般若はね、今より幼くて口癖は『はにゃ～』だって。ていうか『はにゃ～』しか喋らないね。」

般「なによそれ！」

夜「わたしは、わたしは？」

羅「私と夜叉姫は、ほとんど変わってないね。しいて言えば今より

年齢が若いって事かな。」

般「まあいいわ、んで名前の由来は？」

羅「読んでいるとわかると思うけど、ほとんど仏教関連の名前が付けられてるの。十二神将とか護法善神から引用されてるわね。」

夜「わたしと羅刹は八部衆の眷属だよね。宮毘羅くんは十二神将の1人だし、般若は『般若心経』からだよね。」

般「わたしだけ・・・お経なんだ・・・」

羅「まあまあ、いいじゃない。それと『西遊記』の登場人物も出ているってのもわかる？」

夜「え、『西遊記』？えー誰、誰？」

般「わたし解った！羅刹でしょ？」

羅「ぴんぽ～ん！正解。羅刹女ね、牛魔王の妻で芭蕉扇の持ち主なのよね。火焔山の火を消すために来た孫悟空と、戦ったりした人ね。」

夜「なるほど・・・だから『芭蕉旋風脚』なのね。」

羅「他にもう1人いるんだけど・・・わかる？」

般「もう一人？うーん・・・誰だろう・・・」

夜「わかんないな・・・」

羅「それでは、正解を発表します。実は、順風耳先生なのです。」

夜&般「えーーーーー！」

羅「『西遊記』に出てくる順風耳は千里眼と共に、花果山から産まれた悟空を最初に見つけた人物なのよね。まあ、作中にはほとんど関係ない人物だけど。」

般「そんな、レアな登場人物を引用するなんて・・・」

夜「まあ『西遊記』は、冒険小説のお手本だよね。作者の大好きな小説の一つらしいね。」

般「そのうち、金角、銀角とかでてくるんじゃない？」

羅「それはないんじゃないかな？でも、仏教関連で引用していくとなるとその内『西遊記』の登場人物もまた出てくるかもね。」

夜「んで、三章はあたしたちの修行編だよね？」

羅「いいえ、三章は私達はお休みです。」

般「なんでーーー！？」

羅「なんでって、私に言われてもわかんないわよ。原案によると、新しいキャラが出てくるらしいわね。」

夜「またぁ？この物語って脇役のキャラが立ちすぎなんだよね。ぎっちゃんとか、観音さまとかさ。」

般「さわりだけ教えてよ。」

羅「ほんのさわりだけだよ。あのね『ＡＳＨＵＲＡ』を探して旅をする人達が、私達の他にも現れるの。」

夜「へーそんで、そんで？」

羅「おっとここまで、詳しくは三章に入ってから。」

夜＆般「えーーーケチ！」

羅「まぁいいじゃない、私達はゆっくりお休みしましょう。」

夜「だね、さーてとまだおやつは残ってるし。食べながら休んでおこうよ。」

羅「そういう事。今回はここまでにして、お茶会を楽しみましょうよ。」

般「今回はって、２回目もあるの？」

３姉妹の午後のお茶会は、これでお開きです。２回目は・・・あるのか？

三章の1　ASHURA探しに行ってみない？

三千大千世界、この世界には4つの大陸がある。北に『北倶蘆州』南に『南贍部州』、東に『東勝神州』西に『西午賀州』。

北の北倶蘆州は極寒の地であり、そこに住む人々は独自の文化をもっている。南の南贍部州は常夏の地で、そこの美しい海は観光客に人気があり常に賑わっている。東の東勝神州は大陸で1番の大都会、傲来国があり世界の中心になっている。最後に西の西午賀州は、大砂漠『砂伍』と霊峰『須弥山』がある。肥沃な大地に恵まれ、大いなる自然に囲まれた大陸である。

ここ、東勝神州の傲来国には大きな高校がある。そこの生徒で考古学を学んでいる少女、名を『イリス』。同じく彼女の同級生で、名を『アテナ』。彼女達の友達で、歴史学を学んでいる少女、名を『セレーネ』。

彼女たちは、よく3人でつるんでいる。学園の他の生徒からは、変わり者扱いされていて少し浮いている存在だ。

いつもの様に彼女達は、校舎の裏で弁当を食べながらわいわいと雑談をしている。

「ねえ～明日からの夏休み、みんなどうするの？」

イリスはサンドイッチを、パクリと頬張りながら2人に話しかけた。

イリスという少女。

黒髪のセミロングで、眼鏡をかけている。

古文書と考古学が大好きで、１つの事に没頭すると周りが見えなくなる。以前、学園の校庭には古代遺跡があると信じ込み、校庭を穴だらけにした実績をもつ。もちろん古代遺跡など出るはずは無く、

先生たちにこっぴどく怒られた。
「うーん・・・アテネはどうしようなの。」
顎に指をあて、目を閉じながら考えている。

アテナという少女。
金髪のロングヘアーで、語尾に『～なの』を付けて話す。
イリスとは幼馴染で、常に彼女に付いてまわっている。アテナも考古学を学んでいるが、考古学が好きというよりイリスが好きなので一緒にいたいという理由で考古学を専攻している。校庭穴だらけ事件にも、イリスと共に行動している。
「イリス、アテネ。ぼく書庫でさ、面白い本見つけたんだ。」
1冊の古びた本を、2人の前に突き出した。

セレーネという少女。
銀色のショートカットで、ボーイッシュな女の子
背が高く、男の子の様な性格で他の女生徒に人気がある。
この学園に入学したが、毎日がつまらなくて仕方がなかった。そこに校庭穴だらけ事件がおこり、当事者のイリスとアテナに興味をもち友達になった。他の生徒達からは、『なぜ、セレーネさんがあんな子達と』陰口を言ったが本人は意にも介さない。彼女達といると退屈しない、セレーネにとってはそれが1番大事なのだ。

2人の前に突き出された本を見て、アテナはきょとんとしている。
「セレーネちゃん、これなんなのなの?」
「にひひひひ。これはね、伝説の宝石をまとめた本なんだ。ここにね、すっごい面白い宝石の事が書いてあるんだ。」
セレーネは、興奮して鼻息を荒くしている。それを見ているイリスは、ため息をついて話しかける。
「セレーネ・・・あのね、そう言うのはほとんど眉唾(まゆつば)ものなんだよ。だいたい、伝説ってのが怪しさ満開じゃない。」

そうイリスが言い放つと、セレーネがちょっとむっとした。
「何言ってんだい！校庭を穴だらけにした、きみに言われたくないね。」
「もお～2人とも止めなさいなの。」
アテナは、2人の間に入って仲裁した。セレーネは気を取り直して、話を続ける。
「まぁ聞きなって、2人ともさ『ブルーメタル』ってしってるよね？」
「馬鹿にしないでほしいのなの、それくらいアテナでも知ってるのなの。」
アテネはぷんぷんと頬を膨らませ、ウインナーをパクリと食べた。
イリスは食べ終わった弁当を片付け、セレーネにたずねる。
「その、『ブルーメタル』がどうかしたの？まぁ、確かに今じゃ珍しいけどさ。」
セレーネは本をペラペラとめくり、鼻息荒く解説しはじめた。
「そう、『幻の鉱物』って呼ばれているそれなんだけど。その『ブルーメタル』の中でもレアって呼ばれる物が存在するんだ。この本によると、名前を『ＡＳＨＵＲＡ』って言うんだって。」
イリスは、やれやれという顔をしている。アテナはイリスと対照的に、ちょっと興味があるようだ。
「あのねこの本によると、『ＡＳＨＵＲＡ』は３００年前に突如この世に現れたらしいんだよ。誰が加工したか分からない、『ブルーメタル』純度１００％の加工物らしんだ。これを手にした者は、富と名声を手に入れたらしいんだよ。」
「ほえ～『ＡＳＨＵＲＡ』って凄いのなの。富と名声か～ちょっとワクワクするのなの。」
イリスは、腕組をして考えている。そして、ちょっと微笑んで2人に話す。
「富と名声はいいとして、ちょっと興味あるわね。誰が作ったか分からない加工物か・・・オーパーツってことね。考古学的に３００

年って歴史は浅いけど、面白そうな話ではあるわね。」
セレーネは、イリスとアテナの肩をバンバンと叩き、さらに興奮している。
「でしょ、でしょ！そこでね提案があるんだ。明日からさ夏休みだし、探しにいかない？この『ＡＳＨＵＲＡ』をさ！」
２人は、セレーネの提案にびっくりした。
「ちょっとまってなの！いきなり過ぎるのなの～」
「あのねセレーネ、気は確か？『ブルーメタル』でさえ、今じゃ見つけるのも大変なんだよ。それのレアってなると、砂漠で砂粒を探すような物じゃない。」
彼女達のリアクションに、セレーネは口角をあげてニヤリと笑う。
「ぼくもね、馬鹿じゃないんだ。なんの手掛かりも無しに、こんな荒唐無稽な話なんかしないって。この本によると『四大賢者』ってのが鍵を握っているらしんだよ。」
「『四大賢者』ですって？まさか実在するの・・・」
イリスは信じられない、といった顔をしている。彼女らが住んでいる東勝神州は、化学文明が発達している地である。そういう事は、おとぎ話でしか伝承されていない。
「ぼくもこの本を読むまで、まさかと思ったんだよね。西午賀州の大砂漠『砂伍』に住んでいる弥勒（みろく）、同じ大陸の『須弥山』に住んでいる観音（かのん）。後の２人は、ちょっと字がかすれてて分かりにくいんだけど。名前だけは書いてあるね、『普賢（ふげん）』と『文殊（もんじゅ）』」
「せいごがしゅうって・・・何処にあるのなの？」
「西午賀州は私達が住んでいる傲来国から、西へ１０００ｋｍ行った所にある大陸だよ。『須弥山』は有名な霊峰で観光地だから、飛行機で直行便が出ているはずだよ。」
イリスがアテナに説明をしていると、セレーネは本を閉じ彼女らに問いかける。
「で、どう？夏休みの自由研究も兼ねて、『ＡＳＨＵＲＡ』探しに行ってみない？」

イリスは暫く考えて、セレーネに答えた。
「わかったわ、行きましょう。私は『ＡＳＨＵＲＡ』よりも『四大賢者』の方が気になるからね。伝説の人物達が実在するなんて、ぞくぞくするわ！」
「イリスが行くのなら、アテナも行くのなの～」
イリスの言葉を聞いて、アテナはあわてて賛同した。２人が賛同してくれて、セレーネはニコニコしている。
「よっし！そうと決まったら、２日後の８時にゼウス空港に集合だよ。遅れちゃだめだよ。」
２人は頷き、セレーネに微笑んだ。彼女もそれに答えて、笑った。
３人は笑いあい、２日後を楽しみに待った。

そして２日後、空港に着いたイリスは２人の格好をみて怒っている。
「あんたたち何考えてるのよ！その格好で『ＡＳＨＵＲＡ』を探しに行く気なの！？」
「何って・・・学園の制服だけど？」
セレーネの服装は学園の制服で、しかも彼女はミニスカートにニーソックスを履いている。
「校則にも書いてあるじゃない、『校区外に出る時は制服で』って。だから着てきたのだけど・・・おかしいかな？」
イリスは呆れた顔をしてる、そしてうな垂れながら話をつづけた。
「まあ、１００歩譲ってセレーネの格好は良いとしましょう。それよりアテナ・・・あんたの格好・・・」
「え～何かおかしいのなの？かわいいと思うのなの。」
アテナの服装は、ゴシックロリータ。いわゆるゴスロリだ、白いフリルの付いたドレスで頭には大きなリボンを付けている。極めつけには、大きな熊のぬいぐるみを抱えている。
「かわいいよ、とってもよく似合ってるわ。でもね、これからの旅

にはその格好は無いんじゃないかな。」
アテナとセレーナは、今ひとつピンと来ていない。もう何も言う気になれないイリスは、諦めて2人に話す。
「もういいわ・・・そろそろ搭乗時間だから、早くいきましょう・・・」

3人は搭乗手続きを済ませ、飛行機に乗り込む。まずは、『四大賢者』に会うために。彼女達もまた、『ＡＳＨＵＲＡ』探しの運命に巻き込まれて行くのだろうか・・・

三章の2　アテナだって出来るのなの！！

西午賀州は、自然に囲まれた地である。世界的にも珍しい動物や、植物が生息しており国際保護指定地にされている。
その為、近代文明による機器類はごく僅かにしか普及していない。だが観光地としても有名な所でもあるので、特別に指定された土地には東勝神州と変わらない施設がおかれている。

イリス、アテナ、セレーネが降り立った『アルテミス空港』は西午賀州の東海岸にある場所。この空港は東勝神州が誘致している場所であり、西午賀州の自然を研究する為に建てられた。
3人は荷物を受け取り、空港ロビーでこれからどうするか相談していた。

「さてと、西午賀州に着いたけどこれからどうする？」
セレーネは荷物に腰掛け、2人に話しかける。
「とりあえずさ、車をレンタルして『須弥山』に向かおうと思うんだけど。四大賢者の中で居場所がはっきりわかってるのは、『観音』だけだからね。」
イリスとアテナは、うんうんと頷きセレーネに賛同する。するとアテナは何かを思い出し、ポケットの中から何かの紙を取り出した。
「あのねさっき、コンシェルジュの人からこんな紙貰ったのなの。」
取り出された紙を、セレーネは受け取り読み始めた。
「『西午賀州の歩き方』だって。なになに『西午賀州は、大自然に恵まれた土地であります。肥沃な土地は豊富な農産物があり、それらを使ったこの地特有の料理に舌鼓を打つことでしょう。』要するに、ド田舎で料理は美味いってことだね。」

「私達、別に観光に来たわけじゃないんだけどね。」
セレーネは苦笑いをして、続きを読んだ。
「『ですが、治安は決して良いとはいいきれません。砂漠には山賊が出没し、殺し屋、賞金稼ぎなどがいます。特に2人の少女には気をつけましょう。』」
3人は、きょとんとしている。山賊、殺し屋、賞金稼ぎはわかるとして、2人の少女ってのがわからない。考え込んでいると、紙の裏に写真が載ってある。それを見た彼女らは、驚いている。
「うわ～本当に女の子だよ、羅刹と夜叉姫だってさ。ていうか、なんだよこの緊張感のない写真は・・・」
セレーネは、半ば呆れた顔をしている。それもそのはず、その写真に写っている羅刹と夜叉姫は、仲良く肩を組んで微笑みながら写っているからだ。3人は気を取り直して、これからの事を話し始めた。
「治安が良くないのは、傲来国もおなじでしょ?西午賀州の人たちが全員山賊とか、殺し屋とかじゃあるまいし。物騒な所に近づかなければいい事なんじゃない。」
イリスは大した事じゃない、という顔をしている。アテナは、それにうなずく。そこでセレーネが、話をまとめる。
「よっし、それじゃあ車を手配しよう。そんで『須弥山』を目指そうか。」
3人は手を挙げて、おーと号令をかけた。彼女達は荷物をまとめ、空港ロビーを後にした。

イリス、アテナ、セレーネは呆れている。彼女達は西午賀州に着いてから、呆れっぱなしだ。文化の違いというのが、こんなにも落胆させるものかと。
「全く・・・いまどき4輪車はないだろ・・・しかもガソリン車かよ、どんだけ遅れてるんだよ。」
「しかたないなの、ここって国際保護指定地なの。自然を大切にす

るには仕方ないことなの。」
自然を大切にするなら、ガソリンは無いだろう。とセレーネは思ったが、口にはださない。
車を手配した彼女達だが、ここで1つの問題が生じた。
「ところでさ、誰が運転するわけ?言っておくけど私は無理よ、4輪車なんて運転したこと無いもの。」
イリスは、2人に向かってきっぱりと言った。セレーネも困った顔をして、イリスとアテナに話した。
「うーん・・・ぼくも4輪車は運転したこと無いんだよね。どうしようか、今からガイドを雇うってのもなぁ・・・」
「アテナが運転するのなの!」
2人はぎょっとした、予測していた事の最悪のケースだ。アテナの運動オンチは、彼女達は嫌というほど知っている。しかも、方向オンチとくれば始末におえない。イリスとセレーネは言葉を選びながら、なんとかアテナに運転は諦めてもらおうとする。
「ア、アテナいいよ大丈夫だから。知らない土地だし、ガイドくらい雇える余裕はあるからね・・・」
「そうだよ、わざわざアテナに運転してもらわなくてもさ。ぼく、ガイドの手配してくるね。」
アテナは、2人の言い分にムッとした。目に涙をためながら、必死に抗議する。
「馬鹿にするななの!2人はそうやっていつもアテナを馬鹿にして、アテナだって出来るのなの!!」
こうなってしまったアテナは頑固で、言い出したら後には引かない。2人はそんなアテナの性格を知っているので、諦めた口調で話す。
「わかったわ、アテナ。あなたに任せるわ、だけど安全運転でお願いね。」
「イリスがそう言うならしかたない、でもキミ4輪車を運転したことあるのかい?」
アテナは満面の笑顔を浮かべ、胸を張り得意そうに言った。

「任せろなの！お家のお庭で、パパといつも４輪車の運転していたから大丈夫なの。」
おいおい、その程度で任せろって・・・２人は思ったが、これ以上揉めていても仕方がないのでアテナに任せる事にした。
「それじゃあ出発するのなの！みんな車に乗ってなの。」
アテナの張りきりが、２人をより一層不安にさせる。覚悟を決めて、２人は車に乗り込んだ。

砂漠を走ること、１時間、助手席にはイリス。後部席にはセレーネ、そして運転席にはアテナが緊張した顔でハンドルを握っている。セレーネ、は自分のカバンからある機械をとりだした。
「ジャーン！これなんだと思う？」
２人の前にセレーナが取り出したものは、大きなコンパスの様な形状をしている。それを見たイリスはセレーネに尋ねる。
「なんだと思うって・・・コンパスじゃないの？」
「へへーん、そう思うだろ。これはね『ブルーメタル探知器』なんだ、『ブルーメタル』は微弱な電波を発してるんだって。この機械はその電波を感じ取って、指針が方向を示すんだ。まあ、信頼度は８５％ぐらいだけどね。」
イリスとアテナは感心している、そんな機械があったなんて。
「信頼度８５％って凄いじゃない、よくそんなの持ってたわね。」
セレーネは自慢げに、鼻息荒く語りだす。
「実を言うとね、これってぼくの親父の物なんだ。親父って一応科学者だからさ、暇つぶしにこれを作ったってわけ。テストを兼ねて持ってきたんだ、信頼度８５％ってのは親父の計算上の事なんだけどさ。」
イリスはがっかりするところか、期待に満ちた顔をしている。
「セレーネのお父様の発明品なら、信頼できるね。傲来国で一番の科学者なんだから。」
そんな事を言いながら、彼女らを乗せた車は『須弥山』の近くの繁

華街まで来ていた。

須弥山の繁華街、そこに観音が歩いていた。彼女は焼酎が切れたので、使用人に使いを頼んだのだが、皆忙しいらしく暇な者は観音だけで仕方なく下山して焼酎を買いに来たというわけだ。

「全く・・・四大賢者のこのワシが買い物にいかなあかんねん・・・こんなことなら伎芸天（ぎげいてん）を修行に出すんやなかったで。」

ぶつぶつ言いながら、観音は酒屋の前まできた。

「おっさん、すまんけど焼酎くれんか。」

店の奥から、酒屋の主人が出てきて対応する。

「へーい、毎度。あらこれは観音様、あなたが買い物とは珍しい。」

「まあな、色々あって下山してきたわけや。それより親父、この店でいっちゃん良い焼酎おくれ。」

「へいへい、かしこまりました。これなんかいかがでしょう。」

店主から手渡された焼酎を、観音は喉を鳴らして受け取った。

「おお、これは有名な『砂伍（さご）の水』やんけ。親父ええんかこれ？」

「へい、これはなかなか手に入らない物でございます。観音様にはこれくらいの物でないと、お口に合わないかと。」

観音は目をキラキラさせて、店主に話す。

「親父これ貰うわ、なんぼや。」

「そうですね精一杯勉強させてもらって、３０００ギルってところですかね。」

「３０００ギルか、わかった買うわ。ちょっとまってな。」

観音は、財布を取り出そうとしたが見当たらない。滅多に下山しないので、財布を持ってくるのを忘れたのだ。彼女はどうしようと思いながら、途方にくれている。そこへ、３人の少女達が歩いてきた。

観音は藁（わら）にもすがる思いで、彼女達に話しかけた。

「おーい、そこの姉ちゃん達。」

呼び止められたのは、イリス、アテナ、セレーネだった。彼女達は

いきなの事で戸惑っているが、無視する訳にもいかないので返事をした。
「な、なんでしょうか・・・？」
イリスは、恐る恐る観音にいった。観音は人懐(ひとなつ)っこそうな笑顔を浮かべて、彼女達に近づいてきた。
「いきなり呼び止めて悪かったな、ねえちゃんら観光客か？」
「はい、そうですけど。」
観音はますます、にんやりとして話を続ける。
「そうか！ちょうど良かったわ。すまんけど３０００ギルほど貸してくれんか？」
イリスとセレーネは、胡散臭(うさんくさ)そうに観音をみている。何がちょうどよかったんだ？という顔をしながら。するとアテナが観音に近づき、
財布を取り出して観音に３０００ギルを渡した。
「はい、どうぞなの。」
「おお、すまんな大きいリボンのお譲ちゃん。ちょっと借りとくわ。」
観音はアテナから貰ったお金を持って、酒屋に戻っていった。アテナはいい事をしたとニコニコしているが、あとの2人はアテナに呆れた口調で話す。
「あんたね・・・見ず知らずの女の人にお金を貸すなんて・・・人がいいのも大概(たいがい)にしないと。」
「そうだよ、いくらアテナはお金持ちのお嬢様だからって無駄な出費は抑えなくちゃ駄目だよ。」
アテナは、いい事したんだからいいじゃない。という顔をして、彼女達の忠告にピンと来ていない。するとそこへ買い物を終えた観音が、彼女達に再び近づいてきた。
「おおきにな、リボンの譲ちゃん。おかげで買い物できたわ、なんか礼せなあかんな。ねえちゃんら宿は決めてあるんか？」
彼女達は、顔を見合わせてどうしようという表情をしている。そこ

ヘセレーネが、最初に話し始めた。
「ぼくたち、ここへ着いたばっかりなんです。ある人物を探していて、東勝神州からきたんです。」
観音は、買ったばかりの焼酎の瓶を肩に担ぎながらセレーネの話を聞いている。
「探している人って誰やねん？ワシここらへんやったらちょっとした顔やから、手助けできるかもしれんで。」
イリスは言おうか、言うまいか迷った。が、もしかしたら何か手掛かりがあるかも知れないと思い観音に話した。
「あのですね、実はこの須弥山に観音っていう方が住んでいるらしいんですが。なにかご存知ですか？」
ご存知もなにも、彼女らが探しているのが目の前にいる。観音は自分の事だと言おうとしたが、ちょっとした悪戯心が芽生えた。
「そうか、観音様を訪ねにきたんか。あんたら運がええな、ワシ観音様んとこで働いてるねん。よかったら、今から一緒に行くか？」
3人の顔が、ぱぁっと明るくなった。須弥山に到着していきなり、観音の従者に会えるなんてこんな幸運はない。と思っている、それ以上の幸運が訪れていることも知らずに。

観音を車に乗せ、須弥山の頂上までやってきた。車から4人が降り、観音が門前まで歩き出した。
「ちょっと待っててな、いま門開けてもらうさかいに。」
3人は、はいと気の無い返事をした。それというもの、目の前のキラキラの建物に驚かされているからだ。
呆気にとられている3人に、観音が近づき話しかける。
「おーい、何ぼーっとしてんねん。ほら、中にはいろやないか。」
観音に連れられて、門をくぐって中に入る。すると門番が観音に深々と礼をしているのを見て、セレーネがイリスに小声で話しかけた。
「ねえねえ、あの人どういう人なのかな？」

「従者頭ってやつじゃない？だから、あんなに偉そうにしているんじゃないかな。」

２人がコソコソ話していると、４人は大広間に着いた。そして、部屋の奥にある立派な椅子に観音が座った。彼女らは、この人何をしているのと思い状況が把握出来ないでいる。

すると観音は、急に笑い出して３人に話し出した。

「ははははは、騙して悪かったな。あんたらが探している観音はワシのことや、驚いたか？」

イリス、アテナ、セレーナはまだ状況が把握できていない。やっと、頭が整理出来たのだろうか一斉に声を出して驚いた。

「えーーーーーーー！！？」

３人の態度に観音は、してやったりと得意満面な顔をしている。

さて、これから３人の少女達はどうやって観音から『ＡＳＨＵＲＡ』の事を聞きだすのだろうか？

三章の3　格闘技はできないのなの

彼女等の目の前には、四大賢者と呼ばれる『観音（かのん）』がいる。先ほど酒屋の前で、たった３０００ギルの焼酎が買えなかった女性が、自分達が探していた人であると。街に着いた途端に目当ての人に巡り会えるなんて、こんな幸運はない。幸運なのだが、いまいち彼女達は喜べない。なぜだろう、理由は解らないがそんな気持ちがする。

観音は、改めて彼女達に問いかける。

「で、なんでワシに会たかってん？」

３人はまだ、信じられない表情をしている。それもそのはず彼女達が育った地では、四大賢者と言うものはおとぎ話や伝説の類とされている。架空の人物とされている人を目の前にして、３人は言葉が出ない。

「おーい。聞いてるかー？」

自分の問いに返答がないので、観音は両手を口にあててもう一度いった。

最初に我に返ったのは、イリスだった。彼女はとりあえず、挨拶しなければと思い深々と礼をした。

「お、おは、お初にお目にかかります。わた、私達は東勝神州（としょうしんしゅう）の高校生で、夏休みの自由研究の為に西午賀州におられる、四大賢者の１人観音さまに会いにきました。こ、こんなにすぐにお会いできるなんて、し、幸せであられますです。」

イリスの挨拶は、ほとんど何を言っているのかわからなかった。観音は、クスクスと笑いながら返礼をする。

「ははは。おっと失礼、丁寧（ていねい）な挨拶ありがとさん。その高校生さん

らは、自由研究ってヤツでワシを観察にきたんか？」
次に我に返ったのは、セレーネ。彼女は、観音の言葉を聞いて返答する。
「い、いいえ違います。ぼくたちはある本を読んで、『ＡＳＨＵＲＡ』の存在を知り、その所在を知っているのは四大賢者だと書いてあったので会いに来たんです。」
「ふーん・・・なんやお前らもかいな。」
観音が、ぽつりと呟いたのをイリスは聞き逃さなかった。
「お前らも？」
「ああ、こっちの事や気にすな。そんで『ＡＳＨＵＲＡ』を探してどうする気や、願い事でもあるんか？」
イリスとセレーネは、お互い顔を見合わせた。今回の旅は四大賢者に会うためで、願い事など２の次だったからだ。
「ぼくは、願い事なんて別にないんです。なんて言うか、『ＡＳＨＵＲＡ』探しって面白そうだと思って。」
「私も別に願い事は無いんですけど・・・しいていえば、幼い頃生き別れた姉に会えるなら・・・」
イリスはちょっと俯いて、悲しそうにしている。セレーネは、この話を以前聞かされている。彼女はイリスの肩に手を置き、大丈夫よと言うような顔をして慰めている。
「よっしゃ、だいたいの事情はわかった。せやけどタダで教える訳にはいかんで。」
最後に我に帰ったのは、アテナだ。そして、思い出したかの様にしゃべりだす。
「３０００ギル返してなの！」
アテナは手を突き出して、頬を膨らませて怒っている。
「ちょっとまて、その金はワシに会わせたちゅう事でチャラやないかい！」
空気の読めへん譲ちゃんやな、と思いながら観音は呆れている。彼女は、気を取り直して話しを続ける。

「ワシはな、格闘技が好きなんや。そこでやワシと試合して、勝てたら『ＡＳＨＵＲＡ』の事を教えたる。」
３人は、観音の提案に驚いている。
「か、格闘技って、無理ですよ！私達、普通の女子高生ですよ？そんな試合なんて出来るわけないですよ。」
それを聞いた観音は、つまらなそうな顔をして呟いた。
「なんや、しょうもない。せやったら『ＡＳＨＵＲＡ』の事は諦めるしかないな。」
冗談じゃない、せっかくここまで来て何もないまま帰れはしない。
だが、観音と試合をして勝利するなんてのは無理な話である。
３人は、顔を見合わせて相談をし始めた
「どうする？何かいい方法はないかな。」
「どうするったって・・・格闘技の試合なんて無理だよ。なあ、アテナ。」
「・・・・・・」
イリスとセレーネが話し合っている間、アテナは考えている。すると何か閃いた様で、観音に近づき話しかけた。
「ねえねえ、観音のおねーちゃん。聞いてほしい事があるのなの。」
「ん、なんや？言うてみい。」
アテナが、観音の言葉を聞いて再び話し始める。
「アテナたちね、格闘技はできないのなの。だったら、何か他の勝負事ならできないかなの」
「他の勝負？たとえば？」
観音が、珍しそうな顔をしている。今まで彼女の提案を断ってきたの初めてだったので、どうしていいかわからないといった感じである。
「たとえば・・・しりとりとかどうなの？」
「しりとり？あほか、んなもんできるかいな。」
これはさすがに子供っぽかったか、とアテナは断念した。では、次の提案とアテナは言う。

「じゃあじゃあ、椅子とりゲームはどうなの？アテナ得意なの。」
「却下。」
即答されてしまった。自分が得意なゲームを断られて、アテナは困っている。アテナは暫く考えて、最後の手段とばかりに提案した。
「だったら、かくれんぼ！これしかないのなの！！」
「かくれんぼ？かくれんぼねえ・・・」
観音は暫く考えて、ニコリと笑っていった。
「よっしゃ、かくれんぼにしようやないか。他の２人もそれでいいか？」
イリスとセレーネは、急に話をふられてドギマギしている。
「え？いや・・・あの、はい・・・それでいいです。」
２人は、思わず賛成してしまった。でもまあ、反対する理由も見当たらないのでアテナの提案に乗ることにした。
観音は、２人が賛成した事を聞いて、手をパンと叩き話し始めた。
「じゃあ、かくれんぼに決まりや。細かい取り決めは、今日はもう遅いから明日にしようやなか。３人とも今日は泊まっていき。」
３人は客間に通され豪華な夕食を食べ、大浴場に入ったり手厚い歓迎をうけた。彼女達は大満足で、ここまでしてもらっていいのか？と思ったが観音の好意に甘えた。そして、就寝する前に３人は明日の事を相談し始めた。
「かくれんぼかあ・・・アテナ、勝算はあるの？」
イリスは、パジャマに着替えて髪を梳(と)かしながらアテナにたずねる。
アテナは、持ってきた熊のぬいぐるみを抱えながら座っている。そして、きょとんとした顔で答えた。
「勝算？そんなもの無いのなの。」
「えー無いのかよ！どうするんだよ明日。」
セレーネは、下着姿で胡坐(あぐら)をかきアテナに問い詰める。アテナはちょっと、ムッとして答える。
「だったらどうしろって言うのなの！かくれんぼいいじゃないのなの、観音のおねえちゃんも賛成してくれたなの。」

2人が言い合っているのを、イリスは間に入って制した。
「まあまあ、2人ともケンカしないで。とにかく、明日に備えて今日は寝ましょうよ。」
3人は、明日に備えて寝ることにした。明日の事は、明日考えることにして。

夜が明けた、彼女達は朝食を食べ大広間に通された。すでに観音は椅子に座って、彼女達を迎た。観音は昨日のドレス姿と違い、タンクトップにショートパンツというラフな格好をしている。
「おはようさん、どうやゆっくりできたか？出来るだけの事させてもらったつもりやけど、なんか不都合なことなかったか？」
イリスたちは、深々と礼をして答えた。
「十分満足できました、ありがとうございます観音さま。」
「そうかいな、よかったわ。さ、かくれんぼ始めよか。その前に取り決めを話しておくわ。」
3人は、ゴクリと喉を鳴らして観音の言葉をまった。
「まず、普通のかくれんぼとは違うで。隠れるのはワシ1人だけや、それをおまえら3人が見つける。隠れる場所はこの屋敷内、言うても1階だけやけどな。ここの大広間、看護室、厨房、倉庫、書庫、それと4つの客間や。時間は・・・そやな9時から夜の9時までの12時間。その時間内にワシを見つけたら、お前らの勝ち。見つけられへんかったら、ワシの勝ちちゅうこっちゃ。どや、異存はないか？」
彼女達は、顔を見合わせてこれなら勝てるかもしれないと思った。
「わかりました、それでいいです。」
観音は、ニッコリと微笑み彼女達に再び話しかけた。
「そうか、異存はないか。ああ、それとな一応1対3やからワシに不利や。そこで1時間経過する事に、この輪っかがお前らの身体に自動的に装着される。」

観音が、椅子の下から取り出した輪を3人に見せた。セレーネはそれを受け取ったが、結構な重さがある。
「ははは、重いやろ。それ1個が3ｋｇあるねん、それがお前らの身体のどこかに付くちゅう訳や。1人につき4つ、3人目の身体に4つ目の輪が付いた時そこで終了ってことや。」
そんな事は最初に言ってくれ、と思ったがもう後には引けない。彼女達は覚悟を決めて、もう一度返事をする。
「わ、わかりました・・・」
「よっしゃ！ほなこれでいこか。あと15分後に始めるで、準備はいいか？」

こうして、変則かくれんぼが始まろうとしている。はたして勝利するのは、観音か、イリス達か・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5367x/

ＡＳＨＵＲＡ

2011年11月17日20時20分発行